Sword Dancer　　～奪われたキヲク～

Zeke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｗｏｒｄ　Ｄａｎｃｅｒ　　～奪われたキヲク～

【Ｎコード】
Ｎ１１８８Ｈ

【作者名】
Ｚｅｋｅ

【あらすじ】
帝国騎士クアッドと宮廷魔術師リーファ。二人は幼馴染で気の知れた仲。難しいことはよくわからないけれど、何と無く大丈夫。二人は常に前向きな思考でどんな状況でもくじけない。そんな二人が織り成す奇跡のような行き当たりばったりの行動。「他人は暗い過去を背負っていると言うけど、俺たちは気にしてないね！」

一章　焼けた故郷（前書き）

この作品はＴｅａｍ．Ｚｅｋｅの中で二人目が制作しています。物語構成は「あゆむらゆかか」執筆が私「Ｚｅｋｅ」となっております故、作風がずい分と「神と悪魔は人を見て嘲笑う」とは違っておりますが、どうぞお楽しみください。

一章　焼けた故郷

柔らかい風が吹いて、街が見下ろせる場所。
レンガ造りの街がそこにあって、何もかもがゆったりと流れていた。
田舎だと言えばそうなのかもしれない。そしてそんな田舎でずっと暮らして一生街から出ない生活などは考えられなかった。
街を出れば何かがあるというわけでもないのに、ただ無性にそこから出てみたかった。
呆然と街を眺める。
身寄りの無い自分を育ててくれた街に感謝して、頭を下げる。
だが…二年ぶりに戻って来たそこはすでに人が住んでいなかった。
時間はゆったりと流れていた。残酷なほどに。
穴の開いた屋根、崩れた壁、家畜たちは生き残った人々によって運び出され、そこにはもう何も残されていなかった。
この街に侵攻して来た何者かに全てを奪われていた。
クアッド・アルマーティはその街を見下ろして、言葉も出なかった。プレイトメイルに剣を腰にぶら下げ、帝国騎士団に入隊してようやく戻って来れたのに、これでは意味がなかった。村長に立派に成長した姿を見せるもなにも、その村長は亡くなっている。
異変に気づいてクアッドは一人で街の中を探索してみたが、廃墟だった。
ふわりと目にかかる前髪が風に揺れる。穏やかな気候だったこの街は人も穏やかだったのに今は閑散としていた。
「懐かしいね」
隣に座る少女が口を開いた。青い法衣に身を包んだ少女は膝を抱えて、その上に頭を乗せて同じように街を見下ろしていた。優しい少女だった、目を閉じて街にずっと祈りを捧げていた。
リーファ・クライスは同時期に王都、グロリアスへ出向き、宮廷

魔術師団の勧誘を受けてそうなった。彼女と共にここに戻ってきたというのに…、戻ってくるべき場所はもうないとは信じられなかった。

「行ってみようか」

リーファが立ち上がって、悲しそうに笑った。

行ってどうする？何も無いぞ、とはクアッドには言えなかった。

昔からリーファは無駄なことが好きだった。

無駄に動物に触れてみるし、余計なことには首を突っ込んでいく。だからこそ、クアッドとリーファは様々な事件に巻き込まれてしまう。ご免だ、と思いつつも今回ばかりはそうにもいかなかった。彼女は放って置けば一人で廃墟の街に行って迷ってしまうだろう。

「戦闘終了地域への侵入は禁止されていますよ？」

さくっと背後に立たれて、クアッドは剣を抜いた。

「帝国騎士団の騎士様が無闇に剣を民間人に向けるのはいただけませんね？」

二十代後半の男がにこりと優しそうに微笑んだ。慌てて剣を収めるクアッド。男は独特な袴という民族衣装を着ている変わった男だ。

「師匠？」

「お久しぶりです、クアッド君、リーファ君」

クアッドは左膝を地面に突いて、右足を立て、右肘を右膝の上に乗せて、右手の先を左胸に当てて拳を握り、左手で鞘を押さえる。

リーファは両膝を地面に突いて両手を組んで祈るようにして目を閉じた。

敬意を示す相手に対する礼儀作法の一種だ。

「二人とも立派になりましたね。成人の儀のために戻ってきたんですか？」

二人は立ち上がって、男に尋ねられて頷いた。

「教えてください、ダイキ・ヒュウガ師匠。ここでは何が？」

クアッドが尋ねるとダイキは「着いて来なさい」と走り出した。

「はやっ！！」

上体を一切動かさず、足だけでストトトトと丘を下って行くダイキに置いて行かれまいとクアッドも後を追う。
「あふ…待ってくださいよ～」
とてとてと頼りない足取りでリーファもクアッドを追うように丘を下って街に入ると、煤焦げている壁や穴が開いているのが鮮明に見えた。
「あー、気をつけてくださいね」
街の入り口でダイキが追いついた二人を止める。
「マナがすごく乱れてますね」
「ですね。ここは爆発があった場所ですから、炎のマナが溢れているようですね」
「俺には何もわからん」
クアッドが周囲を見回す。魔法に対しての資質が全くないクアッドにはそういうものは一切わからなかった。
「火薬兵器を用いて街を破壊したようです」
一面瓦礫の山だ。
「師匠、どこから攻撃されたんだ?見たところ一方的にやられてるみたいだけど」
「鋭いですね、さすが帝国騎士様だ」
ダイキはふっと笑うと真剣な顔をした。
「この街には武器というものがないし、抵抗する人もいませんでしたよ。ただ逃げ惑うだけでしたからね。ただ、魔法と同じような道具を使って人々は無残にも殺されていきました」
すっとダイキが壁を指差すと、壁に小さな穴がたくさん開いている。
クアッドとリーファが民家のドアを開けてその穴の向こうを見ると、穴が貫通して外の光が中に差し込んでいた。
「魔法じゃないみたいですね」
「魔法じゃなかったらなんだこれ」
「さぁ」

リーファがその現象を魔法ではないと判断すると、その穴はどうやって開けられたのか理解できずクアッドとリーファは首を傾げる。
「クアッド君、リーファ君、ここはあまり安全ではないので、出ましょう」
「ん？」
クアッドは周囲を見回すが、特に危なさそうなものはなかった。部屋の片隅に何かが落ちている。それを拾い上げると、鉄の筒のようなもので中身が空っぽの空洞になっていた。長さ一センチ程度の筒。匂いを嗅ぐと火薬の焼けた匂いがする。あの独特な粉っぽい匂い。
「師匠、これは何ですか？」
クアッドがそれをダイキに見せるとダイキは眉をひそめた。
「何でしょうか。調べるのでそれをくれませんか？」
「え？あ、はい」
ダイキにその筒を渡す。
「連合国軍もしっかりと回収していただかないと…これは抗議する必要がありますね」
「は？」
ダイキはクアッドに「年を取ると独り言が多くなるんですよ」と笑って見せた。
「さぁさ、ここにいると危ない目に合うかもしれませんから。そろそろ巡回の時刻ですし」
「巡回？」
リーファが首を傾げると、クアッドがリーファを押し倒してダイキが屈んで身を隠した。
窓の向こうに人影が見える。
「巡回ってあれかい？師匠」
「そうですねぇ。今日は定時巡回ではないようですね。私たちが村に入ったのがばれているようです」
困りました、とダイキが微笑む。どう見ても余裕があるのは昔か

らだ。
「ティアール山脈を越えたところに私の家があります。そこまで来れますか？」
「ああ、大丈夫だ。師匠はどうするんだ？」
「私はあの兵士たちを誘き出して、二人が脱出するまでの時間を稼ぎます」
ダイキが「行ってください」と外に飛び出していく。
いつまでたっても保護するつもりのダイキに呆れながら、クアッドは師匠なら大丈夫だろうと安心して見送るとリーファを抱きかかえるようにして起こす。
「ありがと」
リーファが微笑んでクアッドがドアを少し開けて周囲を警戒すると、先ほどの緑色のごみをつけたような服装の兵士たちの姿が消えていた。
二人が外に飛び出すと、足元で何かが弾ける。
「ねずみは二匹だと聞いていたが、まさか三匹に増えているとはな」
カーキ色の洋服を着た男がにやり、と筒のようなものをこちらに向けている。四十代前半のいやらしい笑みを浮かべている男で、その後ろには若い緑色の服を着ている男が立っていた。
「貴様は何者だ？」
クアッドが睨みつけると男が「ふん」と鼻を鳴らした。
「帝国騎士団及び宮廷魔術師団を相手取ると後々面倒なことになりますよ？」
リーファも明確な敵意を感じて右手を相手に向けて魔力を収束させる。
「魔術師か。少々厄介な相手だ」
男は片手を空に上げると後ろの二人が筒をリーファに向けた。
「撃て！」
トパタタッと乾いた炸裂音が響く。
リーファの自動魔法でクアッドとリーファの前に光の壁が出現す

ると、そこで何かがはじけた。
「無詠唱の炎属性マナですか」
リーファの意識する領域内の人間を自動的に保護する自動魔法はリーファの意思で発動する。それが今回は炎属性のマナに反応して発動したが、向こうの瞬発的な魔法の発動にリーファは正直驚いた。
「壁に穴を開けた魔法と同じ系統ですか」
リーファが後ずさる。威力は相殺することができるが、クアッドにあれをぶつけられたら恐らく体中穴だらけにされてしまう。バトルフォーメーションを前衛から自ら援護に切り替えて相手の攻撃に対してのカウンターにリーファは自ずと切り替えざるを得なかった。
「宮廷魔術師団の小娘が厄介だな」
男はそう言うとサーベルを抜いて、右手でそれを持ってぐい、と突き出すようにして構えた。
「無益な戦いはお止めなさい」
すとん、とクアッドと男の間にダイキが着地すると、クアッドに剣を収めなさい、とダイキが言う。
「あなたもサーベルを納めてください。私たちは別に戦闘をしに来たわけではありません」
ダイキが男を睨むと、男はにやりと笑った。
「軍人が戦争をしなくて、何が軍人か」
「そう言う話をしたいのならば、せめて私が民間人であるということを考慮して欲しいものですね」
「民間人は、戦闘の真ん中に入ってそれを止めようとは思わんものだがね」
男はくっくっくっと喉の奥を鳴らす。
「ファルバング中将でしたか。私とあなたとは三度目に会うのですから、そろそろ私の言葉も聞いてくれてもいいと思いますがね」
ダイキはやれやれ、と首を横に振る。
「隣の村で貴様と戦ったときは、お前はおめおめと逃げ出したではないか。そういう言葉は勝ってからするものだ」

クアッドとリーファは状況を見て、視線を交わす。
「輝く陽が上る。月は眠りて大地は栄光の閃光に輝くだろう」
カッと光が周囲に炸裂すると、クアッドがリーファを抱えてその場から走り去る。ダイキもすぐに後ろを追ってくる。
「大地と風の精霊よ。祝福されたし」
リーファが詠唱して三人の脚力が一時的に向上して、風のように大地をすり抜け、山脈の入り口に到達するとクアッドはリーファを下ろした。
「さっきのおっさんは知り合いなのか？」
「知り合いというよりも戦場ですれ違っただけですね。国境を越えた向こうの街が潰される時に顔を合わせました」
ダイキに聞かされてクアッドは頭を掻いた。
「師匠はどうしてここに残ったんだよ。奥さんと息子さんはどうした？」
「アレは安全なところに行かせましたよ。私は少し調べることがあって残ったんですが、どうにもきな臭くなって来ましたね。ちょうどいいところに騎士様と魔術師様が通りかかってくれたので、私は守られながら山脈を越えることにしましょうか」
守られる、とは言いようで、クアッドに剣を使わない体術を、リーファに魔法の基礎部分を教えたのはダイキだ。
「それでは魔物が出る夜間は私の家に泊まることにして、昼間のうちに移動しちゃいましょう」
ダイキがすとすとと山脈を登っていく。
薄暗い森林部分は街の人間もあまり近寄ろうとはせず、林道を一歩外れてしまえばそこは野生が犇く。
「最近、ここらで戦闘行為が多くて、獣たちがざわついていますからねぇ」
異様な雰囲気と殺気立った空気が充満していることはクアッドもリーファも感じていた。
野犬が茂みから飛び出してきて、ダイキは首を左手で下から突き

上げるように野犬の身体ごと持ち上げるようにすると右足を右上へと鋭く蹴り上げて野犬を茂みに戻してやる。
「ふぅ。まぁ単体ならそうそう怖くありません。彼らも今は集団的に動いてるわけではないようです」
「護衛なんていらないよな」
クアッドが苦笑するとリーファも困ったような顔をする。
「リーファさん、あれ、焼いてもらっていいですか？」
林道を歩いていくと道の真ん中にたくさんの蔓をうぞうぞと動かしている肉食植物がこちらに向かってやって来ている。蔓をうぞうぞと動かして這うように移動して、大きなつぼ型の葉は消化液のようなものを含んで、動物の死骸などを蔓で捕らえるとそのつぼに押し込んで栄養とする捕食する植物だ。時折、山で遊んでいた子供が捉えられてしまう事件もあった。
「はいな。炎の神が我らに与えた温もりは、時として業火となりて我らを襲うだろう」
ひゅうん、と赤い光がリーファに集まる。
「ふぃあーぶれっど」
どこと無く舌足らずな発音と同時に指先をその植物に向けると、ずんっと炎の球が発射されて植物が破片を撒き散らす。
「残念ですね、あれだけ大きいウツボはなかなかお目にかかれませんが、さすがに人里に現れたら危ないでしょう」
「ほとんど人間を食うような食人植物は帝国によって滅ぼされたはずだけど、生息してるんだな」
「こんな片田舎のほうにもなるとしっかりと根絶することもたやすくは無いでしょうし、種の保存もありますから私は無闇に焼き払うのもよくはないと思うんですけどね」
ダイキは学者肌の部分も持ち合わせているのでそうは言うが、被害が出ることも考えるとそうは言えない。
山道、というのは予想以上に歩く速度に影響が出る。クアッドやダイキのように歩きなれている者ならいざ知らず、子供や女性には

少々酷な道のりでもあった。
とはいえ、村で生活するには山菜を取ったり、果物を取りにいくことがあるので、そうは疲れはしないが、これだけ長時間歩くとなるとリーファにとっては辛い道のりなのだろう。
額に汗を浮かべながらリーファがふらふらと歩く。クアッドはそんなリーファを気にしながら中腹まで上ると、ダイキがどかっと腰を下ろした。
「少し休憩しましょうか」
「そうですね」
クアッドはへたり込むリーファに水筒を渡すと、リーファが嬉しそうにそれに口をつけた。
「すみません、私のせいで」
「気にしないでください。追っ手はいないようですし、この森は住民でも近付きませんからね」
ダイキがふと木を見上げると、小石をいくつか拾ってそれを投げると果物が落ちてくる。クアッドが素早く三つの果実をキャッチすると、ダイキとリーファに渡した。
布で表面を磨いて真っ赤に熟れたそれをかじると、甘酸っぱい味がする。子供のころからよく食べていた果実だ。懐かしいさと同時に失われた故郷を思い出す。
「村はどうしてあんなになっちまったんだ?」
「さぁ、よくわかりませんが、突然襲撃されましたよ。ここは国境近いですからね」
ダイキは「詳しいことはわかりません」と呟く。
「帝国騎士団は制圧されたことを知らなかったんですか?」
「王都には攻撃された事実すら通達されてなかったですよ。まぁ、ここからグロリアスまでだいぶ距離がありますからね…」
馬を使ったとしても十日はかかる距離で、徒歩だとその五倍はかかる。情報の交流がなくても不思議ではないが、攻撃されたとなると話は別だ。

「王都防衛に影響が出そうな襲撃の早さでした。電撃作戦とも言える様な迅速さです」
「とりあえず、グロリアスに行って報告しないといけませんね。南方方面軍を召集するなりしないと」
リーファもだいぶ回復したのか、今後のことについて考え始める。
「とりあえず、山脈を越えましょう。ここら辺は物騒ですから」
ダイキが立ち上がり、クアッドがリーファに手を差し伸べるとそれを受けてリーファが立ち上がる。
「しかし二人とも本当に立派になりましたね。この村を出て行ったときは十四でしたっけ？」
「ですね」
リーファが苦笑する。二人とも十六になって無事成人を迎えたわけだが、あの時と考えた方も行動の仕方もだいぶ変わった気がする。
「出発しよう」
クアッドが戦闘に立って歩いていくと、開けた場所に出る。
「いけませんねぇ」
ダイキが周囲を見回すと、獣の気配がした。
「この時期にアレがいるとは思いませんでした」
ぶわさっと羽音を響かせて、巨大な鳥が着地する。
この山脈に渡ってくる渡り鳥で、子育ての間だけここらを縄張りにする真っ赤な羽の美しい鳥だった。血のように深紅の瞳ゆえに、ブラッディーアイなどとも呼ばれている。全長八メートルの巨鳥はこちらを見下ろすと、首をかしげている。
「大きいですねー」
リーファがにこりと微笑むと、クアッドが一歩後ろに下がる。
「大きいとかそうじゃなくてよ…相手のご機嫌が悪いと食われるぞ」
「正確には食べませんよ。彼らはマナを食しますから。基本的にマナを多く含有している岩石などを食べます」
ダイキがふと、リーファを見る。
マナを多く含有していれば、なんでも食べる。

逆に言えばここに大きなマナを含んでいるのは…。
「リーファさん、逃げなさい！」
「ふぇ？」
叫ばれてリーファがきょとんとすると、ブラッディーアイがリーファに向かって突進した。
「くそ！」
クアッドが剣を抜いてそれを盾にするように左手の平で刃を押さえるようにして間に割ってはいると、圧倒的なウェイト差でクアッドが吹き飛ばされる。リーファはひらり、と突進を三歩ほど横に移動して回避。
「クアッド、あなたはどうしてそうバカなんですか」
ダイキが額を手で押さえて苦笑する。ブラッディーアイは直進的な行動をするので横に移動すれば簡単に回避できる。気をつけるのは嘴だけで、基本的にそれ以外はあまり武器として攻撃してこないのだ。
リーファがひょい、ひょい、と左右に身を回避しながら華麗にステップを続けるが、さすがに登山しているだけに体力が厳しい。
「どうしましょー」
リーファが困ったように呟く。攻撃されていても攻撃しないのは相手が自分より下で、殺すのもかわいそうだ、とリーファなりの考えだった。
「汝、母なる安らぎを求める者なりて、ここに我は歌う。しばしの安らぎを与えん、之は母の歌声なり」
リーファがすれ違いざまに、ちょん、とその羽に触れる。
ずしゃあああっと地面を滑るようにしてブラッディーアイが転んで動かなくなる。
「眠ってもらいました」
リーファがよしよし、とブラッディーアイの羽を撫でる。
「うおっ！いてぇ！」
茂みの中からクアッドが元気よく飛び出してきた。どうやら気絶

していたらしい。
「あの鳥野郎！フライドチキンにしてやる！」
ふーっふーっと鼻息を荒くしているクアッドにダイキが頭を振る。
「リーファ君がもう眠らせてしまいましたから、早くここを立ち去りましょう」
「なんだと！」
クアッドが叫ぶとリーファが苦笑する。
「だめですよー、大きな声を出すと起きちゃいますから行きましょう」
ほんわかとした雰囲気で言われて、クアッドは毒気を抜かれて頷く。剣を収めると三人は歩き出し、ようやくダイキの家に到着した。
ぽつん、と建っている一軒家。所々にコケが生えていたりしていて、独特な雰囲気があった。
「師匠はどうしてこんなところに家を」
「自然が好きなんですよ」
「はぁ、奥さんも大変っすね」
「アレはアレで楽しんでいるようですから、いいのではないでしょうか」
クアッドが「そういうもんですか」と呟く。
「かわいー」
ウサギの入れられた小屋の前でリーファが屈んで嬉しそうにしている。そのリーファの後ろに立つとそっと小さな声でリーファの耳元で囁く。
「そいつは夜になると巨大化して山と山を飛び跳ねるそうだ。そして獲物を見つけてはその血を吸うらしいぞ」
「！？」
リーファは驚いてさっとクアッドの後ろに隠れる。
「私も血を吸われちゃうの？」
「それはないだろ。綺麗な血しか求めないらしい」
「よかった…ってどういう意味ですか？」

にっこりと笑って振り向くリーファが握り拳を小さく掲げてクアッドに迫る。
「冗談だよ。怒るなよ」
クアッドが顔を引き攣らせるとリーファがふぅ、とため息を吐いた。
「私たちの村、なくなっちゃったね」
「だな」
言われてクアッドはうんざりした。自分たちが帝国騎士団や王宮魔術師団に入って功績を挙げれば、村にも補給物資が多く届くようになるだろうし、街道も整備されて暮らしやすくなるだろうと思ったが、肝心の村がなくなってしまったのならばそれも意味がなくなってしまった。
「みんな何処かへ移動しちゃったんですかね」
「生き残った人々は移動しましたよ」
ダイキが食糧庫から出て来て食材をそこに並べる。
「軽く腹ごしらえしてもう寝ましょうか」
山の向こうではすでに日が落ち始めている。暗闇に包まれるまでそう時間もかからないだろう。
焚き火を起こしてその上に網を乗せて、野菜や肉などを焼く。
「切るだけでいいんだから楽でいいですよね」
ダイキはにこにこしながら、ほいっと野菜を空に投げるとクアッドが抜刀して野菜を切り刻んでいく。
「わー、すごいねー」
その芸当を見てリーファがぱちぱちと手を鳴らす。
「私もやってみますね！」
「やめい」
リーファが右手を空に向けて野菜に狙いを定めるが、クアッドがそれを止める。
「適当な大きさに斬るのは構わないんだが、お前がやるとみじん切り以下になるだろうが」

クアッドがため息を吐くと、リーファが残念そうな顔をする。
食材をある程度斬り終えるとダイキが満足そうな顔をする。
「以前にも増して力強くなりましたね。加えて繊細さも実につけたようですね」
「はい、騎士団に入団した後もしっかりと毎日鍛錬しました」
クアッドが照れるとダイキが満足そうに頷いた。
「リーファ君も先ほどの戦闘でわかったのですが、相手の特徴をよく勉強して、効率の良い最小限の行動と適切な魔法の使用を覚えているようですね」
「はい」
リーファが頷く。
「二人とも立派になりましたねぇ」
感慨深そうにダイキは空を見上げる。
「焦げる！」
クアッドが肉をひょい、と網の上からさらって租借する。とりあえず食事を済ませると、リーファが家の中に入ってベッドに入った。
ダイキとクアッドは寝室ではなくて居間で眠ることにして、ランプの灯りに二人の顔が照らし出された。眠るには早すぎて二人は顔を突き合わせていた。二年間と言えばずいぶんと長く話をすることもたくさんある。
ダイキとはかなりの付き合いになるし、親のようなものでもあり、兄のようなものでもある。教養も深いし、人格も優れている良き隣人だ。
「それで二人はユニゾンを？」
「俺は知らなかったんですけどね。宮廷魔術師団は帝国騎士団から人間を選んで護衛につけさせるっての」
ダイキは呆れて見せる。
「そうだったんですか。宮廷魔術師団の魔術師はその帝国騎士団から選任した騎士を護衛に当てることができる。魔術師一人に付き三人までの護衛騎士を選任することができる、というのが宮廷魔術師

団と帝国騎士団の条約締結です。魔術師というのは基本的に後衛ですからね。守ってもらって後ろから攻撃したり、前を守ったりするのが仕事なのですよ」

「そんな制度があったの知らなかったんですよ」

「教えておくべきでしたね。私はそんなこと知っていると思っていましたし、ユニゾンすると思っていましたから」

クアッドは「あー」と呟く。

「俺、あいつに嫌われてると思ってましたから、どうして一緒に王都に出たのかわからなかったんですよ」

「あの事件ですか」

ダイキが遠い目をするとクアッドは顔を伏せた。

「まぁ、あの子が人を嫌ったり出来ない子なのは知っているでしょう？」

「そうなんですけどね。逆に俺は困るんですよ」

「責められない苦しみですか。あなたもずい分と大人になりましたねぇ」

くすくすとダイキが笑うが、クアッドは笑えなかった。

「村の住民は逃げた、と言いましたが、正確には殲滅です」

急に話を変えられてクアッドは息を呑んだ。

「生存者ゼロで、全員、丘陵地帯に埋めました。村長は降伏しましたが、それを聞き入れられず、全員が銃という武器で殺害されたんですよ」

ころん、とポケットから先ほど村でクアッドが拾ったものを転がす。

「これに火薬をつめて、先ほどの男たちが持っていた筒のようなもので発射するんです。魔法とは違った人を殺せる道具です」

「壁に穴を開けるくらいの奴か？」

「そうです、ほとんど目には見えないでしょうが、殺気を感じて避けるくらいはあなたにもできるはずです」

クアッドは頷くと、ダイキはため息を吐いた。

「グロリアスに着いてもこの事は黙っていたほうがよさそうです。恐らくこのことを国はすでに知っています。余計な混乱を防ぐためにも黙っておいたほうが良い」

ダイキがそう言うのだから間違いはないのだろう、クアッドは頷く。

「で、クアッド君はリーファ君に交際の申し込みでもしたんですか？」

「…」

急に話を変えられた挙句、そんな話。

クアッドは視線を逸らして頬を赤くする。

「その気はあるんでしょうけど、そういうのに晩熟なのはいただけませんね。彼女だってその気がないわけではないんでしょうしねぇ」

「今はまだそういう段階じゃないって思ってるんだよ。あいつだって色々あるだろ？」

「色々ありますよねぇ。村を出て行く前に、あの子を押し倒してみたりとか」

「ぐあ」

クアッドがテーブルに突っ伏すとダイキが面白そうにそれを眺めた。

「びっくりしたリーファ君に魔法で山の中まで吹き飛ばされて大捜索、なんていう事件も昔話です」

「もう止めてくださいよっ！」

恥ずかしい過去を話されてクアッドがテーブルをバンっと叩く。

「そうじゃなくて、あいつの親の話ですよ。あいつが宮廷魔術師団に入ったのだって、広域探査系の魔法を習得するためだったって知ってるでしょう？」

「確かにそういう話でしたね。でも彼女は探査系は苦手ですから、苦労するでしょうね」

「攻撃支援型なんですよ。基本的に」

リーファが何度試しても探査系の魔法は習得できなかった。彼女

はそれでもずっと勉強しているのに、どうしても向き不向きだけは克服するのには時間がかかる。
「天才魔法少女なんですけどね。私は彼女が心のどこかでまだ、両親に会うのを恐れているのではないか、と考えています」
「なるほど…」
クアッドは乙女心はよくわからない、と受け流す。
「そう言えばクアッド君も両親によってこの村に預けられていますよね」
「ええ、村長のところに預けられていましたから、正直今回の事件ではちょっと考えさせられましたけど」
「両親に会いたくはないんですか？」
聞かれてクアッドは「んー」と唸る。
会いたくない、と言えば嘘になるが、まず最初に口よりも手が出そうで困る。何よりも十数年間放置されっぱなしなのだから、殴っても罰は当たりそうにもない。
「別にどちらでも構わないって感じですかね。俺にとって両親はいなくてもいても変わらないんです」
「さっぱりしてますねぇ」
ダイキは物事に頓着しないクアッドらしいと苦笑する。
「敵襲ですね」
クアッドが立ち上がって寝室のリーファを起こすと、リーファがすぐに居間に顔を出した。
「こんな夜中によくも…魔物たちの種類も変わっていますから気をつけて脱出しましょう」
ダイキが裏口のドアを開けると、クアッドとリーファがそこから脱出する。
「賢者の梟は夜に舞う。その瞳は闇夜を見つめて何を思う」
ぽん、とリーファの指先が光って、ダイキとクアッドの額にちょんと触れると、闇夜が明るくなった。
「視界矯正魔法まで覚えてるんですか。私がもう教えることはあり

そうにもないですねぇ」
ダイキがよく勉強している子だ、と関心しながらも裏山の方へ入る。
ドンっ！と大きな火柱が上がってぱらぱらと粉のようなものが降り注いで、空が赤く燃えた。
「爆発！？」
クアッドが驚くとダイキがにこにこと笑う。
「どうやら表玄関から律儀に入ってくれたようですね。ちょっとした罠です」
楽しそうにしているダイキだが、火柱はかなり高く上がっている。ちょっとした、どころの騒ぎではない。
「師匠、何しでかしたんですか」
「追悼の花火ですよ。綺麗ですね」
取り合うこともせずに呟くダイキにクアッドはうんざりとする。意外と手加減というものを知らない人だ。
しばらく森の中を進んでいく三人だったが、おかしなことに獣の姿が見当たらない。あれだけの爆発を目の当たりにすれば少しくらいは騒がしくなってもいいものなのだが…。
クアッドが気づいた、と言うことはダイキもその異変に気づいているはず。
「師匠」
「ええ」
二人は視線を交わすと歩を緩める。
「わぷ」
真後ろを走っていたリーファがクアッドの背中にぶつかり、倒れないようにクアッドが腕を掴んでしっかりと立たせる。
「ごめんなさい」
「いや」
クアッドは言いながら周囲を見回す。
静か過ぎる。

「そこの三人！手を頭の後ろで組んで膝を地面につけなさい」
女性の声が響いてダイキが木の上へ跳躍して、枝にぶら下がる。
クアッドはリーファを両腕で抱き抱えると茂みに身を隠した。
「俺は帝国騎士団、宮廷魔術師守護騎士のクアッド・アルマーティだ。そちらは何者だ？」
手を頭の後ろで組んで膝を地面につけ、という口上は騎士団の人間が犯罪者や不審者に対して行う命令で、クアッドも何度か口にしたことのある言葉だ。それ故相手も帝国騎士団に縁のある人間だとはわかったが、素性までは知れない。
「クアッド？なにしてんのあんた」
素っ頓狂な声を出されて、クアッドも聞き覚えのある声だ、と茂みから出るとプレイトメイルに身を包んだ少女がこちらを見て首をかしげている。猫のような瞳をぎらつかせている可愛らしい少女だ。
「お前だって帝国騎士団諜報部員じゃねぇか。何してんだ？」
「諜報部員が何してるか答えると思うの？バカ？」
そりゃそうだ、とクアッドが肩を竦めて見せると、木の上からすとん、とダイキが降りてくる。クアッドはリーファを下ろすとリーファが少女に向かってぺこりと頭を下げる。
「宮廷魔術師の法衣…」
少女はダイキにして見せたように、片膝を突いて敬意を示す。
「私はリーファ・クライスと申します。こちらはダイキ・ヒュウガさんです」
「どうも」
ダイキがにこりと微笑む。
「私は帝国騎士団諜報部所属のリレイン・ミーティアです」
リレインは立ち上がるとじとりとクアッドを睨んだ。
「リレインは俺と同期の士官学校卒業生なんだ。諜報部員ってのは黙っておかなきゃいけなかったんだっけ？」
「当たり前でしょ。あんたのその剣よりも軽い口がべらべら余計なこと言うから私も身分を明かしたけど、諜報部員の私が諜報部員で

すよーって言っていいと思ってるわけ?あんた昔からあんまり後先考えないで行動する奴だとは思ってたけど、ちょっとでもその頭の中身が入ってるって言うならしっかりと頭を回転させたほうがいいんじゃない?そもそもね…」

早口で捲くし立てられてクアッドが「はいはい」と適当に返事をする。

「活発な方ですね」

リーファがその早口に呆然とする。

「一人で三人分くらい喋ってくれそうな人ですね。愉快愉快」

ダイキがくすくすと笑う。

「あなた民間人?この先の村の人?」

年上に対しても同じようにリレインが尋ねる。

「ええ、村人だった人、ですね」

「一ヶ月間くらい、こっちの街に誰もやって来てないから調査するように言われたんだけど、何があったのかしら?」

「おや、帝国騎士団ともあろう方が何もご存じないとはこれは問題ですね」

「いいから答えなさい」

恍けてみせるダイキにリレインが腰に手を当てて、ずい、とダイキに迫る。

「あなたにはお知らせできません。知りたければ村へ行ってください。恐らく死にますがね」

「なっ!?」

リレインが顔を真っ赤にして剣を抜く。

「民間人であろうとも騎士団に楯突くとはいい度胸じゃない?」

「最近の騎士団は容易に民間人に剣を向ける。それでは民間人も騎士団に対する信頼を失墜させざるを得ないということを心得てください」

ダイキが呆れているのを見て、クアッドは意外と礼節を知らない人間には厳しいダイキの姿を思い出していた。

「師匠、小娘いじめて楽しいですか？」
「ええ、とっても」
クアッドが間に入るとダイキがにっこりと微笑む。目が本気だ。
「小娘ってあんたも同い年でしょうが！」
リレインが今度はクアッドに食ってかかる。
「まぁまぁ、とりあえず、どこかの隊が村を襲撃して村は壊滅していましたよ。私たちは今、そこに展開していた敵性部隊から逃げてきたところなんです。下手に近付かないほうがいいかもしれません」
「どこの部隊だか確認できなかったんですか？」
リレインはリーファだけに丁寧に尋ねる。帝国騎士は宮廷魔術師団よりも下位に当たるためにそういうことが発生する。クアッドのように帝国騎士団の上位、宮廷騎士団に入隊できるものは少数精鋭で基本的に貴族の人間しかそこに所属できない。
「私たちの知らない部隊でしたからね。まぁ日が浅いので宮廷騎士団か宮廷魔術師団のセンパイ方に聞いて見るしかありません」
リーファがすらすらと答えて、リレインが「なるほど」と悩む。
「つい先ほど、隣国のアーミルズ共和国がこちらに宣戦布告したから、その尖兵だと思ったんだけど、宣戦布告よりも先に攻撃されていたなんて」
「アーミルズが宣戦布告？内容は？」
ダイキが尋ねるとリレインは嫌そうな顔をする。
「答えてくださいな？」
リーファがそんなリレインに促すとリレインは頷いた。
「わからないの」
「わからない、というより戦争の内容はもうすでに関係ないところまで来ているんでしょうね。長年睨み合ってきた国です。宣戦布告の内容というよりもただの弔い合戦なだけでしょう」
「あなた、意外と国際情勢に詳しいの？」
リレインが首を傾げると、ダイキは苦笑する。
「なにぶん年寄りですから」

「まだ二十六ですよね」
クアッドがダイキの年齢を思い出して、年を取ったとはずい分な言い様だと思った。
「アーミルズとうちは何回も衝突してますからね。今回もなんだかんだで停戦状態が続いていましたけれど、結局のところ互いの疲弊で結果的に停戦になっただけですから、何かの拍子に戦争が再開されたというだけでしょう。国境付近の人々はいい迷惑ですがね」
ダイキが戦争は人々を混乱させる、と呟く。
「とりあえず、村が壊滅したってことは伝えておかないといけないわね。私はグロリアスに戻るけど、クアッドはどうするの？」
「俺たちも一応グロリアスに戻るかな。一応、帰郷してるって連絡してたけど、帰郷するも故郷がなくなっちまったんじゃねぇ」
リレインはそれを聞いて言葉を詰まらせる。
「ごめん、無粋なこと聞いてたのかもね」
「気にすんな。俺もリーファもあの村で育ったけど、生まれた場所がわかんねぇんだ」
「何気に私もあそこの出身ではありませんからねぇ」
ダイキがさらりと呟く。
「師匠、あそこに住む前はどこに住んでいたんですか？」
「お花畑が綺麗なところですよ」
「おっさんが言うと気持ち悪いよ」
にっこりと微笑まれてリレインが頬を引き攣らせる。
「傷つきました」
がっくりと肩を落としてみせるダイキにリーファがくすくすと笑う。
「さて、立ち話もなんですからそちらの諜報部員さんの案内で近くの街まで行きましょうかね」
「諜報部員諜報部員ってあまり言わないでくれないかな？」
リレインは面倒な人を拾った、と頭を抱え、四人は暗闇の中を突き進んだ。

二章　籠の中の騎士

ぐるり、と四方を十人近い騎士に囲まれてダイキが両手を頭の後ろで組んで立膝を突いている。
「説明していただけますかね？」
ダイキが隣で立っているクアッドに尋ねる。
「いや、俺もよくわからないんですよね…」
森林の街、フォレスティに到着して早々、周囲を囲まれた。そこまではまだ理解できる。こんな時間に外をうろついていれば不審者だと思われても仕方が無いのは想像に容易いのだが…。
「ご苦労様です、中央の騎士様と王宮魔術師団の方」
と言われたのだ。
「説明なさい」
リレインがそう言った男に言うと、男は不審そうな顔をした。
「説明も何も、国境の村を壊滅させた男ダイキ・ヒュウガの指名手配を見て捕らえたのではないのですか？」
「はい？」
リーファが首を傾げると、ダイキもさすがに驚いた様子で周囲を見回す。
「手配書です」
紙切れを渡されると、よく似た人相書きが記されている。
「えっと…師匠？」
「私は知りませんよ」
ダイキはため息を漏らす。
「めんどくせぇや。ダイキ・ヒュウガの身柄は俺、クアッド・アルマーティが責任を持って監視する故、兵を引き上げられたし」
「はっ！」
南方方面軍の指揮官なのか、この街の騎士団の指揮官なのかはわからないが、見た目も無駄に熱い男が指示を出すと兵たちが引き上

げていく。近隣の住民は何事かと集まっていたが、それらも解散するようにクアッドが支持を出す。
「兵舎をご利用になさいますか？それとも宿のほうを急がせましょうか？」
指揮官らしき男が尋ねて来て、クアッドが悩むとリーファがそっとクアッドに耳打ちした。
「…クアッド、兵舎だと師匠が牢屋に入れられちゃうから、宿にしよう？」
「だな」
クアッドも納得する。
「宿を取ってもらっていいですかね？兵舎だとちょっと息苦しくて。それに休暇中なんで」
クアッドが申し訳なさそうに言うと、指揮官らしき男が「おお」と大仰に驚いてみせる。
「休暇中にも凶悪犯の拘束に尽力なされるとはさすが中央騎士団の騎士様だ。わかりました、早急に宿を手配させましょう！」
深夜時間帯なのにデカい声を張り上げて男が「おい！」と近くの兵士を呼びつけて偉そうに指示を出す。
「私はこの人が凶悪犯には見えないから、ちょっと調べてみるわね」
リレインがささっと人ごみの中に消えていく。
「師匠、もう立っていいですよ」
「そうですね」
よっこらしょっとダイキが立ち上がるとリーファがクアッドの持っている手配書を眺めた。
「でもどうして師匠が国境の村を壊したって話が伝わってるんですかね。おかしくないですか？」
「私もそう思います」
ダイキがにっこりと微笑む。
「なんで変なんだ？」
クアッドが首を傾げるとリーファがえっとね、と説明する。

「だって、リレインさんは村から連絡がないから様子見に行く途中に私たちと鉢合わせしたんだよ？」
「ふんふん、それで？」
「えっとね…つまり諜報部員のリレインさんは誰よりも早く情報を入手できる立場の人なの。それなのに彼女は村に着く前にこっちに引き返したの」
「まどろっこしいぞ。結論は何だよ」
クアッドが苛々したように腕を組む。
「もう、ちょっとは考えてよ。私たちが村の情報を持っていて、他の誰も村のことは知らないはずでしょ？なのにどうして師匠が村を壊滅させたっていう情報が出回ってるのか、おかしいと思わない？」
「なんで？」
クアッドがきょとんとする。
「他の誰かが知ってたんじゃないのか？」
「知っているわけ無いでしょう？村は壊滅したんですよ？生き残りがいないんです。私以外ね」
ダイキがうんざりとしたように言うと、クアッドが「なるほど」とつぶやく。
「奥さんと息子さんは？」
「家族の人間が私を犯人に仕立て上げるなら話は別ですけど、アレがそれをすると思いますか？」
ダイキに言われてクアッドはダイキの奥さんを思い浮かべる。リーファ以上に天然ボケ系の人だからそれは有り得ない。
「考えてみたけどよくわかりません…」
クアッドがうなだれる。
「私たちにもわからないから、今はリレインさんの調査を待とう」
リーファが指を立ててにっこりと微笑む。
「そうですね。憶測で行動できるような身分ではなくなってしまいましたし…私が犯罪者ですからね」
ダイキは面白い話ですねぇと人事のように笑っている。

「宿の準備が整うまでどう過ごされますか？」
　指揮官の男が聞いてくるがどうもこうもない。深夜時間帯の行動など制限されているし、本来は騎士以外は外出すら認められていないのだから、やることなどあるはずがなかった。
「その宿というところに行くけど、案内してくれない？」
　リーファがかったるそうに言うと、指揮官の男が右ひじを曲げて左手を胸に当てると頭を下げた。
「はっ、かしこまりました！ではこちらへ」
　リーファは引き攣った笑みを浮かべて「ありがとう」と答える。無理して笑っているが、どうやらああいうむさ苦しいのはお気に召さないらしい。
　宿に着いて一つの部屋に案内されると、リーファがベッドに倒れこんで眠り始める。
「…早いな」
「疲れたのでしょうね。寝起き、移動でこの事態ですから」
　確かに気を張るような事件の連続ではあった。深夜の時間帯は基本的に外出禁止命令が出ているので、夜更かしという概念があまりない。王宮関係の職務につく人間は基本的にそういう人間が多い。クアッドのような騎士たちは深夜になると賭博やら何やらで夜更かしすることも多かったが、魔術師団でそういう話はあまり聞かれなかった。
「師匠はこの先、ちょっと不自由になるかもしれませんね」
「大丈夫ですよ。あと、師匠と呼ぶのは止めたほうがいいかもしれません。私はダイキと呼び捨てにしてください。あと丁寧な口調も止めましょう」
「はい、わかりました」
　と、言われてもすぐに変えられるはずも無い。世間から見て犯罪者でもダイキは何もしていないのだし、尊敬する人間だからこそ、そんな簡単に命令できたりするわけもない。
　コンコンと窓に何かが当たる音がしてそちらを見るとリレインが

出窓を叩いていた。
「入れてくれるかな？」
ダイキが窓を開けると、よっと屋根に掴まった手を離し、身軽にひょいと中に入るリレイン。
「騎士よりも泥棒のほうが向いているんじゃないですか？」
「時折自分もそう思うんだけどね」
ダイキに言われてリレインが苦笑する。
「何か分かった？」
「うん」
ぼふっとベッドに座ってリレインが難しそうな顔をする。
「中央騎士団がダイキ・ヒュウガを指名手配したのは理由が二つあるみたいね」
「一つは村に関わった武装集団ですね？」
ダイキが言うと、リレインが目を丸くした。
「その通りだよ。よくわかったね」
「人生長生きすると色々わかるものです」
ダイキがふふ、と笑う。
「それくらいしか一つ目はわからなかったんだけど、問題は二つ目なんだ」
リレインがぴっと指を立ててくるくると回す。
「本当はダイキ・ヒュウガを騎士団長が探していて、効率よく発見させるために指名手配しているってことがわかったんだ」
「人探しのためにってことかい？」
クアッドがそこまでして探す価値があるのか、と悩む。
「なるほど。騎士団長はカーランド・ウィルソンですね？」
「ダイキさんって何者？」
リレインが怪訝な顔をする。
「騎士団長勅命で指名手配されるってよっぽどのことだよ？」
「うちの家内がカーランドの妹なのですよ。たぶんアレがカーランドに頼んで私を探すように仕向けたのかもしれません」

「大それた奥様だこと」
リレインが頭を抱える。そのために国家の騎士団数万が動いたとなるとすれば、それはそれで騎士団は素晴らしい団結力と行動力を示したことにもなる。しかも局所的に。
「どうしてもグロリアスまで出向く必要が私にも出てしまいましたか。私はもうちょっとあの地域を調べたかったのですが…」
調べるも何も、犯罪者呼ばわりされたまま周辺をうろつく事はできないだろうし、クアッドたちの拘束から逃れたと言うことになれば次は容赦なく攻撃を受けて殺されてしまうかもしれない。さすがにクアッドたちの評価を下げるわけにも行かなかった。
「しかし村を殲滅した犯人かもしれないって言う触れ込みはどうかと思いますけどね」
クアッドがやりすぎだろう、と一人ごちる。
「わかったことは、火急の用って奴があるみたいなのよね。それは私にも調べられなかったから、方面司令官に聞けばいいのかもしれないけど」
「方面司令官っていうとここら辺だと…」
クアッドが悩むと、リーファがむくっと上半身を起こした。
「魔力反応」
リレインとダイキが窓を見ると、ふわり、と光の球が入ってきて炸裂すると同時に影のようなものが出現する。
「通信魔法だね」
クアッドが剣を抜こうとするとリーファが「大丈夫」と教えてくれる。
「ダイキ・ヒューガ」
投影された半透明の大仰な装飾鎧の男がダイキを呼ぶ。
鋭い目付きに尋常ではない威圧感のある男は見紛うことなく、クアッドたち騎士を束ねる騎士団長、カーランドだった。
「義兄さん、お久しぶりですね」
「貴様…斬るぞ。妹を放り出しておいてどの口が義兄さんと言うの

か」
「この口です」
ダイキが自分の唇を指差して苦笑すると、カーランドが目を閉じて歯噛みする。軽口を叩かせれば恐らくダイキの右に出るものはいないだろう。
「貴様は放って置くとすぐにふらふらと出て行くからな。そこのクアッド騎士に見張ってもらうために犯罪者になってもらった」
「なんという人権侵害なんでしょうか」
ダイキが呆れると、クアッドもそう思った。正直、それはやり過ぎだ。
「騎士団長殿、村の壊滅の件を報告いたします」
リレインが言うと、騎士団長が頷く。
リレインの説明に騎士団長が応え、しばし二人の会話が続く。クアッドはその様子を見て「まさかな」とつぶやいた。
クアッドは騎士団長クラスの人間がどうしてリレインのような新米と面識があるのか、首を傾げていた。
「リーファ、ちょっといいか？」
クアッドがリーファの隣に座り、そっと耳打ちする。
「はいな」
リーファが目を閉じて、騎士団長の通信魔法に逆探知をかける。
「偽者ではないようですよ」
「だよな。じゃあ何で騎士団長ともあろう方がこんな通信魔法なんかでこっちに連絡してくるんだ？」
「私に聞かれても困るよ、何かあるんじゃない？」
「その何か、が問題ですね」
いつの間にかダイキが二人の前に立っていてクアッドが驚く。
「クアッド、リーファ」
カーランドに呼ばれて二人がびくっとする。
「何でしょうか？カーランド騎士団長」
クアッドが簡易敬礼をしつつ尋ねると、カーランドが苦笑する。

「貴殿にダイキ・ヒューガを王都まで連行してもらいたい」
「引き受けました」
クアッドが応えるとカーランドが満足そうに頷く。
「そこの不逞の輩は逃げ足と忍び足が得意だから気をつけるように」
「ひどい言われようですね、義兄さん」
「そう呼ぶな！私は…私は妹を貴様にやった覚えは無いっ！」
カーランドが声を張り上げるとダイキがくすくすと笑う。
「剣で勝ったらくれるって仰せになられたでしょうに」
「くっ」
カーランドが苦虫を噛み潰したように渋い顔をすると、通信が切れた。
「師匠…余計なことしないでくださいよ」
クアッドがやっちまったよ、とつぶやく。今回のことで色々と聞きたいことがあったのに、相手を怒らせて通信途絶などでは全く見当がつかない状況は変わらない。
「いえ、これでもスキンシップの一部だったのでつい。いつも私と義兄はそんな感じなんですよ」
「それでいいのかよ」
クアッドは良く分からない交流の仕方だ、とつぶやく。
「とりあえず…」
リーファはにっこりと微笑むとばたん、とそのまま倒れてまた眠り出す。
「…就寝しましょう」
「だな」
クアッドとダイキは隣の部屋に移ってベッドに入る。
なんだか嫌な予感がする。
クアッドは何と無く、そう思うと目を閉じた。

ごろん、と寝返りを打ってクアッドは何かを抱きしめた。

胸の中で暖かいそれを引き寄せる。
「ぅー」
苦しそうにそれがうめき声を上げるのでクアッドが目を開くと、リーファが胸の中で安らかな寝息を立てていた。
「…起きろコラ」
クアッドがリーファの肩を揺すると、椅子に座ってにこにこと笑ってこちらを見ているダイキとリレインがいた。
「師匠もリレインもリーファを止めようとか思わなか…わけねぇか」
クアッドはダイキに常識を求めても無駄だ、と諦める。
「私は別にあんたらがどんな関係だろうと関係ないけど、私があんたを起こそうとしたら、リーファが疲れてるからダメって言って、そのままご一緒しちゃったわけよ」
リレインが「あついわね」とにやける。
「そういうわけじゃねぇんだけど」
「おはようです」
ぱちっと目を開いてリーファが上半身を起こす。
「おはよう。じゃなくてだな。お前は何をしている」
「二度寝って気持ちいいよね」
「ですね…」
見当違いな言葉を返されてクアッドが肩を落とすとリーファがベッドから抜けていく。
「朝食の時間はとっくに過ぎちゃいましたから、クアッドは軽く何か食べて置いてくださいね」
「今何時？」
「十時回ってますね」
うげ、とクアッドは頭を掻いた。身体がすっきりすると思ったらけっこうな時間眠っていたらしい。
「リレインさんがどうして騎士団長から勅命を受けて村の捜索に駆り出されたのか、という話をしてたの」
リーファがにこにこと笑って椅子に腰掛ける。

「へぇ」
「クアッド君は昨日、そのことを気にかけていたみたいですから、この機会に聞いてみたんですよ」
「リレインが実は騎士団長の娘だったりして、信頼できるとか？」
クアッドが適当に言うと三人がきょとんとしてクアッドを見ている。
「なんでわかったの？」
「あんたどこで調べたのよ？」
「私も気づかなかったことですよ？」
リーファ、リレイン、ダイキが順に口を開く。
「俺はまだ眠っているらしい」
「起きてるよっ！」
クアッドが横になるとリーファが叫ぶ。むくり、とクアッドがまた起き上がる。
「本当なのか？」
「嘘ついてどうするのよ」
リレインがむっとした顔をする。
「リレイン・ミーティアって名前で自己紹介したのには理由があって、騎士団長の娘ってばれると色々と周りが気を使うからだったんだけど、どうして気づいたの？」
「騎士団名簿」
クアッドが米神を摩りながら、気づいた経緯を話す。
「同期卒業生の名簿、入学時に記載されてたのはリレイン・ミーティアだったけど、卒業名簿の時はリレイン・カーランドで記載されてたんだ。卒業生百八十四名の中で入学時と卒業時に名前が一致しないのは二人だけだった。一人は途中で結婚して姓名が変わってたって気づいた。他の名簿の苗字と同じ名前になってたからね。後はリレインだけだった」
二年前の名簿と一年半前の名簿を覚えている時点でおかしな話だ。
「私が結婚してるとは思わなかったの？」

「お前、結婚するときは騎士団辞めるって言ってたのを昼飯食ってるとき言ってたよな。偶然聞いたのを覚えてたんだ」
「驚愕の事実ですね」
ダイキがその記憶力に感嘆すると、リレインも呆れた。
「あんた、諜報部に来れば、だいぶいい仕事するんじゃないの？」
「ん、俺はあまりそういう仕事向いてないと思うよ」
クアッドが伸びをして窓を開けると、街は俄かに活気付いていた。
「何と無くわかったことだけど、騎士団長の妹が師匠の奥さんだけど、騎士団長の妹って本当の妹じゃないんじゃないかって思ってるんですけど」
「そうですよ」
ダイキが肯定するとクアッドはやっぱり、と呟く。
「正直に言えば、そこで一番違和感があったんですよ。騎士団長は今年で三十九です。リレインが十六。これはいい。師匠が二十六で奥さんが…二十四。騎士団長と師匠の奥さんの年の差がありすぎますし、顔立ちが似ていない。まぁ兄妹と言えども顔立ちが似ている、似ていないはありますけど…騎士団長の母親は師匠の奥さんが生まれるころには亡くなっていて、騎士団長のお父さんは再婚されていない」
「どこでそんな話を聞いてくるんですか？」
ダイキが尋ねるとクアッドはどこだったか、と悩む。
「士官学校にある月報があるじゃないですか、それを読んでると騎士団長の経歴とかその周辺の身辺関係がそれと無く書かれてますよね。総合して考えるとあれって内部情報が筒抜けなんですよ」
「普通、そこまで気付かないわ」
リレインが有り得ないと首を横に振る。
「注意して論理的に物事を並べていくと結構、見えてくることがあるんだ」
「いやはや、驚きました」
ダイキが満足そうに手を叩いて笑う。

「クアッドが壊れた」
「どういうことだよ！」
リーファが泣きそうな顔をしてクアッドが叫ぶ。
「で、私は囚人な訳でして、騎士様に連行されなければなりません。出発の準備をしましょうか？」
囚人、と自ら言いつつダイキはそれを楽しんでいるような節があるが、クアッドは深く考えないようにする。何事も経験ですよ、と口癖のように言うダイキは囚人になったということすら経験の一部として考えているのかもしれない。
「あぁ、そうだ。グロリアスに行くには二つの方法があるんだけど、リーファが船ダメだからさ。山道を行くことになるけどいいかな？」
「大きく迂回しなければならないの？」
リレインが嫌そうな顔をすると、リーファが「ふねー」と目を回す。リーファを船に乗せた瞬間、海に落ちた過去がある。極度の船酔いと水の上に浮いている感覚が身体に合わないらしい。今も思い出して目を回すほどに…。
「迂回どころの話ではないですよ。直線距離で川を渡れば三日でグロリアスへ到着するでしょうけれど、源流まで遡って迂回すると優に一週間はかかっていました」
ダイキもさすがにそこまで囚人の身でいたいわけではないらしく、顔をしかめる。
「私はこの街に残りますね」
リーファが悲しそうな顔をしてベッドに横になる。
「俺を掴むな」
クアッドが呆れるとリレインが大きく息を吐いた。
「宮廷魔術師ともあろう者が船一つでそんなに怯えるなんて」
「私も知りませんでしたよ。リーファ君がそんなに苦手なものがあるなんて」
ダイキが興味深そうに丸まっているリーファを観察する。
「だって、あんな塊が水に浮くんですよ？沈んだら魚の餌になって

しまって、私は泡になって消えてしまうんですよ？」
「どこの誰がそんな適当なことを言ったんですか」
リレインが苦笑すると、クアッドが頬を引き攣らせている。
「アンタかっ！」
「言ったのは俺だけど、本気でそんなことを信じて船が怖くなったとか考えられるかよっ！」
「そうやって適当なことばかり言ってるから、あんたは…」
「ん？」
リレインが頬を赤くして俯く。
「なんだよ」
「別に何でもないわよ！」
リレインが怒って立ち上がって部屋を出て行く。
「取り合えず、次の街に行きましょう」
「だな」
クアッドはリーファを説得し続けてまた山道を辿る。
リレインは一言も口を利こうとせずに、船に乗るために川沿いの街へ到着すると、クアッドたちは川の様子を見て愕然とした。
「川？」
「じゃあありませんね、これは」
クアッドが川である場所を指差して三人に尋ねるとダイキがそれを見て応えた。
ぎとぎとした何かの液体が上流から下流に流れ、魚がぷかぷかと浮いていて、それも腐りかけている。腐臭がひどく思わずリレインとリーファは口を手で覆っていた。
「さすがにこの状況で船を出している船頭はいませんね。リーファ君の望み通り、源流を辿っていくしかないようです」
「船じゃないよー」
リーファが両手を挙げて喜ぶとうぷ、と腐臭で吐き気を催したのかすぐに口元に手をやる。
「尋常じゃないですね、これは」

「源流は源流で何かありそうね。川沿いの街でこれから下手すると源流の街、ソーシアで何かがあったのかもしれないわ」
さすがに異様な光景にダイキが川を見つめ、リレインが源流の街、ソーシアでも異常が起こっているかも知れないと不安そうに呟いた。
この街の住民の男たちも不安なのか川を眺めては、見物に来る子供、老人、女たちを危ないからと近づけないようにしている。
「それにしてもこの広い川が全部こうなっていると言うのならば、だいぶひどく汚染されていますよ」
ダイキが腕を組んで悩んでいる。
「確か、王国最大の川だよな」
「ええ、動力船が無いころは迂回していました。向こう岸を見てください」
クアッドは向かい側を見ると、うっすらとぼんやり陸地のようなものが見えるだけだ。
「あそこにも街があるんですけれどね、見えないくらいでしょう？」
ダイキがそれほど遠いのです、と呟く。
「海、とまでは言いませんが、それに近い距離はあるんですよ」
「へぇ」
「どうしたものでしょうかね」
ダイキが周囲を見回すと、リレインの姿がない。
「騎士様だ」
リーファがとてとて、と騎士三人に近付いていくのでクアッドもそのすぐ後ろに張り付く。守護騎士としての役目を果たしているクアッドにダイキは思わず笑みが零れる。
「尻に敷かれている旦那みたいですよ？」
「師匠に言われたくないですね。奥さんに頭が上がらないんでしょう？」
言われっぱなしも癪なのでクアッドが言い返すとダイキが苦笑する。
「すみません、この川はどうしてしまったんですか？」

リーファが騎士に尋ねると、騎士が顔を見合わせて、右肘を曲げてその手を左胸に当てて拳を作る簡易敬礼をした。
「今朝方からあの不思議な色がするものが川の表面を流れ始めて…魚の死骸が流れて来ているのです。現在、上流のソーシアに派遣を行う予定ではありますが…」
騎士たちが言葉を詰まらせる。
「何か問題でも？」
ダイキが尋ねると騎士たちが剣に手をかける。
「ダイキ、囚われの身ででしゃばるな」
クアッドが申し訳なさそうに言う。村を一つ一人で破壊したなどという噂が広まっては騎士も例え丸腰の男相手でも警戒するに値するだろう。実際、ダイキは素手でもここら辺にいる騎士たちを全員、殴り倒すくらいはできるはずだ。
「あぁ、そうだったんでした。そうですね」
ダイキがクアッドの後ろに下がる。
「問題でも？」
クアッドが尋ねると、騎士たちは余り喋りたがらないのか言葉を「あー」と濁らせている。
「ここの指揮官の息子が現在、指揮官代行を行っているんですが…その母親が過保護なんですよ」
しゃなり、と貴族然とした装飾鎧を着けた二十歳くらい男がやって来る。
「河川警備司令官、ハイライン・タロットです」
妙に線の細い、男とも女とも言えない綺麗な肌をした美形の男は細身の刀身の剣を腰にぶら下げている。なんとなくすらりと足が伸びていて、逆に気持ち悪いくらいのスタイルのよさだった。
「中央騎士団の守護騎士様と宮廷魔術師様ですね？」
「ああ、囚人の護送中だ」
クアッドが答えるとハイラインが頷いた。
「ボクがソーシアに行く準備をしていたら、お母様が勝手に五十人

ほど人を集めてしまっていてね」
「そんな大所帯じゃ移動だけで時間がかかるし、指揮も面倒になるだけだろう。従者は二人くらいでいいんじゃないか？」
クアッドが何を考えているのか、と渋い顔をするとハイラインが苦笑する。
「言ったでしょう、過保護なんです。ボクも二人くらい引き連れていこうとしたんですが…こんな事態で何が起こるかわからないだろう、とね」
爽やかな笑顔で言うが、今はそんな風に笑っていられる状況ではない。
「船は出せないんだろ？」
「出せると思いますか？沈んでますよ」
「だったな」
先ほどの川に停留している船の大半が奇怪な沈没船のオブジェになっていたのを思い出す。
「仕方ないな。俺たちがソーシアに行く。ハイラインはお母様の気でも引いて置けよ」
「申し訳ありませんね。前回、騒ぎがあったときに勝手に飛び出して、ひどく心配をかけて以来、過保護に拍車がかかってしまって」
ハイラインが上品に頭を下げる。
「あれはハイライン様の行動があったからこそ、盗賊団を追い払うことができたのですよ」
「ハイライン様は間違っていません」
騎士たちが口々にハイラインを擁護するところを見て、クアッドは目を細める。ただのお坊ちゃまではなく、母親が問題なのではないか？とも取れる。
「一緒に行くか？」
クアッドが尋ねると、ハイラインが困ったように視線を泳がせる。
「行きたいのは山々なんですけどね。噂をすると着ましたよ」
「ハイライン！どこ！どこなの！？」

甲高いヒステリックな声を上げて、とても淑女とは思えない高そうなドレスを着た三十も後半に近い女がうろうろとしている。こちらに気づいたその女が足早にこちらに来た。

「ハイライン！あなたはまたうろうろしているのですか？街は危ないから外に出てはいけないと言っているでしょう？」

「申し訳ございません、お母様。ついては先にこちら中央騎士団守護騎士様と宮廷魔術師様にご挨拶をしてはいただけませんでしょうか？騎士貴族として礼節は大切かと」

ハイラインが笑顔で促すと、女は「あら」と大仰に驚いて二人に向かって裾を持ち上げて上品に会釈する。

「失礼いたしました」

「いえいえ」

リーファが片手を挙げて答えると、女はすぐにハイラインに向き直った。

「勝手に出歩くと、母は心配なのです！ああもう、どうしてこんなことになっているのかしら！」

「お母様、お母様、落ち着いてください」

「落ち着いていられますかっ！民は苦しんでいるのですが、私はあなたのほうが心配なのです」

「おー」

クアッドは見事な過保護っぷりに顔を引き攣らせ、ダイキは顔に手を当てて、これは凄まじい、と呟いている。リーファは興味もないようで周囲をきょろきょろと見回していた。

「ハイライン様！申し上げます！」

そこに違う騎士がやって来て敬礼する。

「どうした？」

ハイラインの顔から柔らかい笑みが消えて、指揮官そのものの顔つきに変わった。出来る男のオーラが全身から溢れていて、母親ですら口を閉じる。

「盗賊の一団が…街の娘をさらって行きました。返して欲しければ

盗賊団の頭を解放しろとのことです」
「…こんなときに」
ハイラインがギリ、と歯を鳴らして悔しがる。
「賊はこの街から少し離れたケーブ洞窟に本拠地を構えていますよね？」
「はい。恐らくそこに娘もいるかと」
「お前も娘か？」
騎士がゆっくりと頷く。普通の父親ならば慌てふためいているだろうが、男は冷静だった。騎士としての正しい姿ではあるかもしれないが、父親としてはどうなのだろうか？とダイキはそれを眺めている。
「私が」
「いけません」
ハイラインに母親が食って掛かる。
「このばばあ」
クアッドがいい加減に頭に来て口を開くと、リーファがびくっと肩を震わせる。
「ダメだよ、そんな言い方」
「うるせぇよ。このババア、人の命がかかってる時に保護欲なんぞ出しやがって、いっぺん頭の中掻っ捌いて脳みそ抉ったほうがいいぜ」
あまりの物言いに母親が口をわなわなと動かして、顔を真っ青にさせたかと思うと真っ赤にさせた。
「なんという！正式に騎士団に抗議させていただきますっ！うちのハイラインは絶対に危ない場所へは行かせませんからね！」
「公務執行妨害で逮捕しろ」
クアッドが近くの騎士に命令すると、近くの騎士が迷った挙句、女を拘束する。
「この女は騎士の名誉を侮辱する怨敵だ」
ハイラインはそれを黙って見ていて、助けようともしない。クア

ッドがにやり、と笑っているのを見て、何かあると感付いている。
「自宅で軟禁でよろしいでしょうか？」
ハイラインが尋ねると、クアッドが頷いた。
「連行しなさい」
実の息子に連行命令まで出されて、母親がショックで昏倒するが騎士たちは女を抱えるようにして連れて行った。
「二、三日、軟禁でもして釈放してやんなよ」
クアッドがくすくすと笑うと、リーファが「悪人だー」と呟く。
「人質奪取に三人、ソーシア方面に二人で行って帰って来て状況を報告するってのはどうだい？」
「そうですね、それがよろしいかと」
ハイラインが同意すると、ひょっこりリレインが姿を現した。
「あのオバさん、すごいね。暴れまくって騎士さんたちが荒縄で縛ってたよ」
驚いた、とリレインが呟くと、ハイラインとリレインが挨拶する。
経緯を聞いたリレインが「なるほど」と納得した。
「そういうわけで、ソーシア方面にはリーファとリレインで向かってくれ」
「へ？」
リレインが首を傾げる。守護騎士が守るべき宮廷魔術師を放任すること事態がありえない。
「わかったー」
リーファがにこりと了承してリレインがぎょっとする。
「待って、待った！仕事しなさいよあんた」
「ケーブ洞窟の構造上、それは仕方ないんですよ」
ダイキが食って掛かるリレインを宥めると、リレインは首を傾げる。
「ケーブ洞窟の壁面は魔法を反射する特殊な鉱石で出来ていまして、リーファ君の魔法が壁面に当たるとボールのように跳ね返ってきます。洞窟ですから、四方八方からの兆弾になる可能性があるため、

できるだけ魔術師は席を外しておいてもらいたいんですよ」
「そうなのか」
クアッドが驚くとダイキは眉をひそめる。
「知っていてリーファ君を外したんじゃないのですか？」
「いや、こいつが暗くて狭いところが苦手だから外した」
クアッドが正直に言うと、リーファが頬を赤くする。ぱっと見、欠点の無い宮廷魔術師のようで、蓋を開けて見ると、とんでもない問題児なのがリーファで、欠点だらけのクアッドは実は秀才、とはなかなか面白いユニゾンだ、と呆れる反面関心さえ持てる。
「…わかったわ。私が守護騎士代行するから」
リレインは付き合っていられるか、とリーファを連れて行ってしまう。
「俺とハイラインと師匠で行こう」
「わかりました」
「ダイキ・ヒューガです。よろしく」
ハイラインは差し出された手を見て、やや間を開けてから手を握り返す。
「あなたの手は血塗られているのか？」
「どうでしょう。それは否定できませんね」
ダイキが苦笑いすると、ハイラインは手を放す。
「暖かく、大きく、優しい手だ。そしてクアッドさんが師匠と呼んでいる。私には貴方が殺戮を犯す人間には見えない」
「それは過大評価だ。主観を捨てたほうがあなたは長生きをするでしょう」
ダイキがふっと悲しそうな瞳を浮かべる。
「お、変わったものが並んでますね」
ダイキは商店に並べられている鉄の扇子を見つけて、それを手に取る。
バンっと片手で持って広げ、手首の撓りを使ってまた元に戻す。
「ご主人、これをいただきます」

「あいよ」
無愛想な主人がダイキを見て、金と品物を引き換える。
「なんですかそれ」
クアッドが尋ねるとダイキは満足そうに四十センチ大の棒をぽんぽんと右手で左手を叩くようにして音をならしている。
「鉄扇ですよ。武踏の道具でして」
左右にそれぞれ一本ずつ、鉄扇を帯に挟んでダイキが瞬時に両手でそれを掴んでバンっと広げる。鋭い突きにクアッドは頭を逸らしてそれを回避すると、手首を返して首にずんっと衝撃を叩き込まれる。
「ぐあっ」
意外と痛い。クアッドが脳震盪を起こしてふらつくと、ハイラインが興味深そうにダイキを見ていた。
「武踏とはよく言いますね。鋭く、美しく、舞うように攻撃するんですね？」
「ですね」
ダイキは満足そうに鉄扇をまた帯に仕込む。
「ケーブ洞窟では狭いでしょうから、こういう小回りが効くような道具のほうが武器としては効率がいい。クアッド君もハイライン君も剣よりも徒手空拳に近い形になると思うので、気をつけましょう」
「はい」
「ですね」
クアッドとハイラインが頷くと、ダイキが先を歩き始める。
「クアッドさん、ダイキさんとは何者ですか？」
街を出て草原を歩く。来た道を少し戻らなければならないが仕方がない。クアッドは尋ねられて一概にはどうとも言えなかった。
「あの不自然な格好に、見慣れない武器を手馴れて使う。かと思えば騎士のこともよく知っている」
袴姿に鉄扇、二十台半ばで胡散臭い。確かに何者か問う気持ちがわからなくもないが…。

「俺の師匠で騎士団長の妹さんを奪った悪漢」
「ひどい言い様ですね」
ダイキが「あんまりだ」と肩を落とす。
「お前らとまれ！」
いかにも盗賊です、と言わんばかりの汚い服装をした男が街道に飛び出して、ダイキが鉄扇を右手で一直線に放り投げると、男の眉間に当たって男が真後ろに倒れて昏倒する。めきょり、という頭蓋骨が割れたような音が確かに聞こえた。
ダイキは鉄扇を魔法で引き寄せ、それを手で受け取り帯に挟むとスタスタと歩き出す。
「…ひでぇ」
クアッドが街道の隅に男を移動させて、胸の前で十字を切る。急いでダイキの後ろに戻る。
「ご苦労様です」
ダイキが微笑み、クアッドが首を「別に」と呟く。
この世界では基本的に殺人はよほどのことが無い限り罪には問われない。街の外に出てしまえば自分の身は自分で守らなければならないのだから仕方が無いといえばそれまでなのかもしれない。
だからと言ってそれを容認していいのだろうか、とクアッドが不満そうな顔をしているとダイキが頬を掻いた。
「えっとですね、クアッド君。人命とは尊いものですが、それを無慈悲にも盾に取り横暴を通そうとする輩がいる。その瞬間、私たちは常に何が正しくて何が間違っているのかを判断して行動しなければなりません」
「はい」
クアッドは腰に下げた剣に手を当てる。わかっていることだし、理解しているつもりでもあった。だけれど…やはりいい気分ではない。
「他に方法は無いのか、ですよね」
「わかってます。俺にはまだそこまで、情けをかけたりできない。

そこまで力はないんです」
　クアッドは村を出て行く時に出会った少女の事を思い出して、自分の力の無さを痛感した出来事が脳裏に浮かんだ。
「大丈夫ですよ。君は立派な騎士様だ。これからそういう、殺す以外の方法を見つけてくれると信じています」
　クアッドは無言で頷くと、ハイラインは剣を握ってそれをゆっくりと抜き、クアッドに向かって振り下ろした。
「なっ！」
　クアッドも剣を抜きざまにそれを刀身を縦に剣を重ねる。
　ジャキィン！と派手な音がして二人が弾かれ合って距離を置く。
「二人には死んでいただきます」
「どういうことだい？」
　クアッドが尋ねると、ハイラインが冷たい瞳でクアッドを見下ろしていた。
「うんざりなんですよ、理想を掲げて死ぬ。そんなのはね」
「お坊ちゃまの反抗期にしちゃ、だいぶ遅れてるな。お屋敷の中で栽培されて頭の中にカビでも生えたかい？」
　クアッドが剣を構えるとハイラインも剣をゆっくりと構えなおした。
「どうでしょうかね。そうなのかもしれません」
「いや、違うな。お前の言ってることは嘘だらけだ。それが嫌ならばまっすぐな太刀筋は生まれない。そう、もっと別に目的がある」
「私たちは婦人ではない。騎士だ。話し合うには剣で」
「いや大体察した」
　クアッドは剣を収める。
「お前は騎士ではない。これで十分」
　すっと右拳を前に突き出すようにしてクアッドがずいっと一歩前に出る。
　彼は全うな騎士だ。が、その精神は騎士道にない。
「派手な立ち回りを演じて見せても、お前は道化師には向いていな

いんだよ」
「知った口を利くものですね」
ふと、ハイラインは気づいた。そこにいたはずのダイキがいない。
先ほどの買い物の時にそっと耳打ちされたのだ。
この誘拐事件は茶番であり、ハイラインの仕組んだことである、と。
リレインに指示を出して、誘拐された女の家を訪ねるとすでにその女の荷物は粗方片付けられていると聞いたダイキは既にこの事態を予測している。
騎士たちの一部にもハイラインの味方がいるらしく、ハイラインを援護して立ち回っている連中がいたこともリレインの調査でわかっていた。
「偽装した自分と女の分の死体を焼いて、俺たちが死ぬ。そうすれば救出に向かった人間は全滅させられて盗賊は利用価値がなくなった俺たちを放置して逃げ出すっていうシナリオだな?」
「よくわかったね」
驚きもせずにハイラインがにこりと微笑む。
「考え直せよ」
「もう戻れないだろう?法を遵守する君が運悪く居合わせてしまった」
「法は剣で遵守されない。むしろ法は人の心によって遵守されるべきだ」
「君は…優等生なんですね」
ハイラインが哀しそうに微笑んだ。
師匠は先にケーブ洞窟へ向かったはずだ。地形的に厄介な場所では師匠のほうが早い。戦力分散と説得。それがクアッドに要求されたことだった。
綺麗な剣筋を持つハイラインが犯罪に手を染めるとは思えない。
騎士とはそういうものだ。真っ直ぐ過ぎるゆえ…何かが彼を変えてしまったのだろうか。

クアッドはふぅ、と息を深く吸い込む。
呼吸が…消えた。
間合いを掴もうとしていてハイラインが目を細める。クアッドの一挙手一投足全てに集中しなければ瞬間的にねじ伏せられる。それは戦う者の直感。
中央騎士団、守護騎士のクアッド・アルマーティ。最年少守護騎士である彼が弱いはずは無い。肩章のエンブレムに輝く、銀剣は彼の功績を示している、騎士団長から授与される最高の名誉を称えるもの。
ハイラインはそれが…気に入らなかった。
彼は恵まれているのだ。自由で、気高く、強く、賢い。
檻の中に入れられたような自分とは違い、どこにでも自由にいける。
そんな彼に、自分の何が理解できるのか…。
「悪いけど、事情は後で聞こう。まずは話をしたい」
「君は騎士で、ボクが騎士じゃないなら、剣では語れまい」
「そうだな…。ハイラインという騎士がいると思えば、俺は剣を抜いて同じ騎士として話をしようか」
クアッドは身を低く構えると、ハイラインは剣の切っ先を左下に向けて、駆け出した。
わかってるよ…。ハイライン、守るべき以外に君は剣を振るわないのだろう？
クアッドは彼と会話をするために、拳に力を込めた。
私たちは婦人ではないのだ…。

三章　騎士王女と宮廷魔術師

ソーシアに向かう。そして引き返す。
油性のぎらぎらした水面がゆっくりと下流に向かって流れているのを横目に、リレインを前にリーファがゆっくりと歩いている。本来、急がなければならないのだが、リーファの歩調が思った以上にゆったりとしていて、急ぐに急げない。正規の守護騎士ではない仮の守護騎士という立場上、リレインは宮廷魔術師であるリーファに文句も言えなかった。
言えないだけで、鬱憤が溜まるのは否めないのだが…。
「リーファさん？もう少し急ぎませんか？」
距離が離れて振り返りざまに尋ねると、リーファが追いついてにこりと微笑む。
会話という会話がなかった。成立しないのだ。どんな言葉を投げかけてもリーファはにこにこと微笑むだけで、まともな返事を何一つしない。クアッドはよくこんな子と一緒に旅をしていたものだ、と思えるほどコミュニケーションが取れないのだから、リレインは頭を抱えたくなる。
「大丈夫だよ。日没には着くと思う」
「日没には戻りたいんですよ。私は…」
うんざりとするとリーファがまたにこりと微笑む。
「知ってる？二人ほど私たちの後ろをついて来てるの」
「え？」
突然そんなことを言われて、リレインがリーファの後ろを見ると、こそこそと物陰に隠れるようにしている男たちがいた。
「いつから？」
「街を出た辺りからかな？」
リーファが小首を傾げる。リレインはその尾行に全く気づかなかった自分の失態に気づいた。彼女はゆっくり歩いていた訳ではない。

ゆっくりと歩いて相手の出方を見ようとしていたのだ。諜報員として、自分に付く尾行や監視に対して敏感でなければならず、そのための教育を受けていたはずなのに全く気づかなかった。リレインはリーファの感知に驚く。伊達に宮廷魔術師ではない、とリーファに言われている気がした。

「どうします？」

リレインが剣に手をかけると男たちが身を隠した。

「ダメだよ。こっちは気づいていない振りをしていなければならなかったのに」

リーファが「あーあ」と呟いて歩き出す。

「申し訳ありません」

リレインが頭を下げてリーファの後ろに付いて歩き出す、後ろから強襲される可能性のほうが高いのだから、前に出るより後ろに立っていたほうが守りやすい。騎士が前、魔術師は後ろという陣形は基本ではあるものの、教科書に書いてあるだけでは戦場では生き残れない。常に戦場では前が後ろで後ろが前でもある。どちらが前、というわけでもない。

「リレインさん、三十歩程歩いたら、そのまま後ろを見てくださいね？」

「はい？」

リレインは何を言われたのか理解できず、とりあえず自分の歩を数える。

十。

二十。

三十。

突然、目の前に居たはずのリーファの姿が消える。驚いたが言われたまま振り向くとリーファがかなり後ろのほうに立ってこちらを見ている。そして二人の間に、例の男たちが挟まれるようにして立っていた。驚いたのはリレインだけではなく、男たちも左右に首を動かして酷く慌てている。尾行、とは後ろに付くもので前に出るも

のではない。そんなのは彼らにも十分わかっている。が、いつの間にかリーファを追い抜かしてしまっていることに動揺しているのだろう。

「そういうことならっ！」

リレインが駆け込みざまに剣を抜いて一人の男に剣を付き付ける。リーファも掌をこちらに向けてにこりと微笑み、男たちが両手を挙げた。

「なんで付けて来たの？」

「お前がこそこそお屋敷の周りをうろついていたからな。気になって兄貴とつけてきたんだよ」

「兄貴さん？」

リーファがもう一人の男に尋ねると、男が頷いた。

「幻影魔法か？」

「はい。私の姿を消して、幻影の私に注目してもらいました。歩くペースをさらに下げてあなたたちが接近したときに幻影を解けばリレインさんだって振り返るでしょう？」

「打ち合わせという打ち合わせはなかったけど、リーファさんとクアッドっていつもそんな感じで行き当たりばったりなわけ？」

リレインがため息を吐くとリーファが苦笑する。どうやらそうらしい。

「お屋敷、ハイラインさんの？」

「そうだよ。そっちのここら辺じゃ見ない女騎士がうろついてたら何かあると思うだろ？」

「何かはあったけれどね。見たところ騎士じゃないみたいだけど、ハイラインの雇った盗賊かしら？」

リレインが尋ねると男たちは「はい、そうです」とは言わない変わりにたじろいでいる。それでは自白しているのも変わらない。

「向こうはクアッドと師匠がどうにかしていると思うから、私たちはソーシアに向かいましょう」

「そうですね」

リレインが剣を収めると男たちがきょとんとした。
「俺たちをどうこうしないのかい？」
兄貴と呼ばれた黙っていた男が尋ねてくる。
「どうこうされたいなら、先ほどと同じように尾行して来てください。警告します、私たちに危害を加えて進行を遅らせようとした場合は、無力化させていただきます」
リーファがにこり、と微笑んで会釈して歩き出す。二人の男は項垂れて着いて来ようとはしなかった。
「ところで、ハイラインさんの雇った盗賊というのは？」
「ん。えっとですね。私が街で得た情報では、ハイラインさんと付き合ってる町民の娘がいたらしいんですけれど、その子は飲み屋で歌を歌っている子だったんです。まぁ、あの母親はそれをよく思わなかったらしくて、別の盗賊団にその子を抹殺するように金で雇った。ハイラインは相手の盗賊を討伐するときにその事実を知って、今度は同じように盗賊を雇って娘を誘拐させた、ということらしいですよ」
「短期間でよく調べたものだね」
リーファはリレインの行動力と情報収集能力に感嘆すると、リレインが照れたのか頬を掻く。
「ハイラインさんがすぐ側にいたので、道具屋の主人にその内容を書いた紙を預けて、ダイキに知らせたの。後はダイキからクアッドに情報が伝わってどうするかは二人が決めるでしょう」
法務執行権は騎士団が持つが、諜報部員であるリレインはその権限を持たない。要するにクアッドに一任する以外方法はないのだ。
「今ごろ、クアッドとハイラインさんが喧嘩してるね」
リーファがふと背後を振り返る。
「クアッドのこと知ってると思うけれど、騎士団時代の彼は強かったし、大丈夫だとは思いますけどね」
リレインはクアッドと一度だけ、中央騎士団の訓練で手合わせしたことがある。彼は剣を抜かない戦いを好み、剣を抜けば怒涛の攻

めを見せる。一太刀で確信する事…あれは「鬼神」だ。父ですら手古摺るだろうと言う騎士の申し子。だが彼はまだ若い。その父、騎士団長の言葉が気になった。

「リレイン、クアッドなら大丈夫だよ」

リーファがまるで自分に言い聞かせるように言った。

剣を抜いた。

クアッドは剣をゆっくりと左手で握り、そこらへんの棒を拾ったかのようにだらりと腕を下に落としている。

「ハイライン、君はとても強かったよ」

滴る血が剣を滑り、地面に落ちると赤い染みが広がっていく。

「君は確かに、愛する者のために剣を振るい、俺を自らの道のために排除しようとしたんだね」

見下ろすハイラインは目を見開き、首から下を失った状態でこちらをなお睨みつけている。

ダイキが娘を連れてきた瞬間、クアッドは剣を抜いてハイラインを腕、胸、下腹、両足に切断した。瞬間的な斬劇だ。ピッと閃光が走ったと思った瞬間、ハイラインの身体が崩れた。文字通り、立っている彼の関節のつなぎ目が瓦解するかのごとく、崩れた。

返り血一つ浴びず、ただクアッドはそのハイラインであった者を見下ろす。

「騎士とて、道を踏み外せば外道と変わらん」

ふと、ダイキが連れた少女を見てクアッドは首を傾げる。

震える手を口元に当てて、目を見開き、涙を流して何事かを呟く少女と殺戮の現場、そしてその正義を振るう両者の剣の片方は地に堕ちて、片方には剣が錆びているかのように血が伝っている。

「…クアッド？」

ダイキがハイラインを横目で見ながら呼びかける。

「師匠、この人はたぶん、幸せにはなれないよ」

クアッドはぴっと剣を振るって血を飛ばすと、少女の頬にそれが付着して涙と混じった。
「行きましょうか、ソーシアへ」
「ああ」
クアッドは頷くと剣を収めて立ち去る。二人の背後で少女はハイラインの身体を拾い集めて、一つにまとめていた。綺麗な洋服が血に染まることも問わず、その作業を続けてなお、涙を止めることは叶わないだろう。
「斬る必要はありましたか？」
「あった」
ダイキに聞かれてクアッドは即答した。
「もし、俺があそこで彼をねじ伏せたとことで、彼は死んだよ。それだけ気高い人間だ。正義、とは人の中にある揺ぎ無い絶対的なもの。彼は愛する者のためにした自らの行いを絶対にしているからこそ、生死を問わず俺に立ち向かった」
「騎士道に背きながら、心の芯から騎士だったわけですか」
ダイキは理解できませんね、と苦笑する。
「戦えば自害するハイラインと戦って俺に惨殺されたハイラインを見る。どちらの選択肢も彼女にとっては辛いことかもしれません。けれど、あの子は復讐を糧に生き続けるでしょう。それは、悲しみを抱えて生き続けるより容易いんです」
「その復讐の対象が自分であっても構わない、と？」
「少なくともこの剣は、悲しみしか生まなかった」
クアッドは剣を手で押さえて、涙を流していた。
愛とはそれほど残酷なものか、と問うが答えが返ってくることは無い。ハインラインが騎士でなければ、あの母親が愚考を犯さなければ、もっと違う形になっていたのかもしれない。
「納得、してはいないんですね」
「してません。むしろできません。ハインラインの野郎、なんで生き続ける選択をしなかったんだか…あいつは剣を振るった。言葉が聞

こえた」
確かに感じた、彼の言葉。
君は正しい騎士だ。だからこそ、私を斬らなければならない。私は絶対に君に勝つことはできない。何故なら私も騎士で君も騎士。ならばどちらの騎士道が間違っているのか、明確だからこそ、私はここで死のう。
「死を覚悟した目をしていましたからね」
ダイキが哀しそうに背後の少女を見る。だいぶ遠いが彼女は膝を突いてハイラインの身体の上に覆いかぶさった。
「死んだか」
クアッドは振り返らずに、呟いた。
「騎士とは、ただ一つの純愛も守りきれないものか」
見上げた空は、気持ちいいほど晴れている。
悲劇は名家の騎士と酒場の少女の物語。
互いに惹かれ合い、それをよく思わない者からの被虐を受けた少女。
その陰謀を知った騎士は自らと少女を作為的に消して…姿をくらまそうとした。
たった一つの、勇気ある逃避行。
そこに居合わせた騎士。
騎士道を守る騎士に異端の騎士。
相、対すればどちらも剣を抜くのは必至。
そうしなければならないのか、と自問自答しつつも彼は騎士を斬る。
そして少女は愛する者を失い、その傍らで同じように倒れた。
そういうお話。
「ハイライン指揮官が死亡。賊は？」
「同じく、全員消えてもらいましたよ。彼の名誉のために相討ちということで処理しますね？」
「そういうことにしておきましょう」

クアッドは頷くと、ソーシアへと急ぐ。
ソーシアにて分隊長からハイラインの代わりの指揮官を街に送ってもらえば戻る必要もないだろう。リレインがソーシアの街から引き返す途中に合流できればいい。
「この結果まで予想して私も止めませんでしたが…良かったと思えないんですよね」
「…」
クアッドとダイキが川沿いに戻って上流に向かって歩き出すと、途中、薄汚れた格好をした男たちが川を眺めているのを見つけた。
「失礼、青い法衣を来た女性と騎士の女性が通りませんでしたか？」
ダイキが尋ねると、男たちは顔を見合わせる。
「上流のほうに歩いていったよ」
「ありがとうございます」
ダイキが頭を下げると、黙っていた男のほうが首を傾げる。
「そっちの騎士さん、血の匂いがするね。俺たちと同じ匂いだ」
「兄貴、何を」
もう一人の男が喧嘩はもうたくさんだ、ともう一人の男に弱ったような声を上げる。
「斬ったからな」
クアッドが答えると、兄貴と呼ばれた男は頷いた。
「人斬りは俺もお前も変わらんのに、どうしてお前たちは許されるんだろうな」
「さぁね」
クアッドは苦笑して「じゃあな」と手を上げると、兄貴と呼ばれた男が頷いて「じゃあな」と答える。
俺もお前も変わらない、か。
クアッドはその通りだな、と思うと川を眺めた。
淀んだ川の流れが血の匂いを洗い流してくれるかと思ったが、油の鼻につくような匂いが余計に気分を悪くさせる。
「きさまらあああああっ！」

リレインの声が響いて、クアッドとダイキが顔を見合わせて駆け出す。

ソーシアまであと少しの場所で、剣と剣のぶつかり合う金属音と魔法の爆発音が響く。

「何事ですか！？」

「どうした！」

クアッドがリーファの前に立って守護騎士の任務に復帰し、ダイキがリレインの隣に立つ。四人の見慣れない洋服を着た男たちがこちらに向かってサーベルの切っ先を向けた。

「月下の淡光により守護されたし」

リーファの魔法で四人が光の球体に守られると、男たちのサーベルから放たれた光が球面に当たって霧散する。

「これは…」

ダイキが顔を顰めると、男たちが同時にリレインとダイキに向かって飛び掛る。一人が高く飛び、一人がそのまま走りこんで来る。ダイキが鉄扇を広げて手首のスナップを利かせて左手から鉄扇を飛ばすと、飛び掛ってきた男がサーベルでそれを弾いた。バランスを崩した。ダイキはそれを見て低い姿勢で駆け込んでくる男に集中する。バランスを崩したほうは後回しで十分。右手の鉄扇を畳んで、サーベルと鉄扇がぶつかり合い激しい音がする。手首を返してサーベルを叩き落して、ダイキが左脚を抉り込む様にして蹴り込んで、転ばせると鉄扇を帯に挟んで開いた右手で男の手首を掴んで地面に伏せさせ、膝で首の骨を押さえ込んだ。ごきゃっと音がして動かなくなる。すぐに着地して姿勢を整えて再度跳躍して上から攻撃しかけてくる男を見上げて、ダイキが左手を懐に入れて何かを放り投げると、眉間にそれが突き刺さって男がダイキの上を通過して倒れこんだ。

上下のコンビネーションを見て、リレインが剣を握り締める。一歩大きく後ろに跳躍して、トントンと細かく後ろにバックステップすると、跳躍した男が膝を曲げて地面に着地して、その反動を利用

して大きく前に飛び出してくる。
「はっ！」
掛け声と同時に、バックステップからステップイン。左足を軸に右足を強くけって左回転に周り、剣を横薙ぎにして、跳躍してきた男を叩き切るとすぐ後ろから駆け込んできた男が突っ込んでくる。回転した勢いのままに一回転して、その遠心力を利用したまま上から地面に叩きつけるようにして剣を振り下ろすと、駆け込んできた男の頭が綺麗につぶれた。
「いけません！」
ダイキがクアッドに叫ぶと、クアッドがリーファの身体を右手で抱き寄せて、剣を縦に振るうと矢が剣に弾かれて地面に落ちる。遠くに弓兵が見えるが赤い装飾の施された変わった弓をこちらに向けて構えている。
「洋弓」
ダイキが目を細める。
「クアッド」
リーファが輝く光の弓をクアッドに手渡して、同じく輝く矢を渡されたクアッドが弓に矢を番える。
「はっ！」
ぴんっと弦を弾く。番える、弾く。番える、弾く。
見事な三連射で木の陰に隠れた男たちが頭から地面に叩きつけられて、攻撃がやんだ。
「どうぞ」
クアッドが捨てた剣をリーファが手にして、差し出してくる。弓が手の中で霧散して、クアッドは剣を受け取った。
「咄嗟とは言え、剣を捨てちまうとはね」
クアッドが苦笑するとリーファが「だねぇ、騎士の風上にもおけないねー」と呟く。
「さすが、元ハンターですね。弓の扱いは得意ですか」
「まぁ獣より人間のほうが当てやすいとは思ってはいましたよ」

ダイキにクアッドが苦笑してみせる。村に居たときは獣を狩ってはそれを食料としていたのだから、弓の扱いはお手の物だ。さらにリーファの魔法弓は風の影響を全く受けないのだから、狙いを定めて弾くだけでほぼ、思ったとおりの軌跡を描く。これほど楽な射的もない。

「んで？どうして襲われたのか、教えてくれるか？」

クアッドがリレインに尋ねると、リレインがソーシアの方角を指出す。

「ソーシアが全滅しているわ。私たちはもう少し先まで近付いたんだけど、追い返されちゃってね」

「待て、どういう連中だった？」

「私たちの村を襲った連中と一緒の格好をした人たちだよ」

リーファに言われてダイキとクアッドが顔を見合わせる。

「異邦人っぽいよね」

リーファがリレインを見ると、リレインが頷いた。

「私たちの知らない武器や軍隊だったし。アーミルスの軍の人も混じってたよ。ていうかもうすぐそこは王都グロリアスじゃない。どうするの？」

リレインが困ったようにクアッドに尋ねるが、クアッドも目を細めるだけでいい案など出てこない。

「河川を封鎖した理由は…それですね」

ダイキがふむ、と悩むとクアッドも納得した。船で行けばグロリアスにすぐ到着できるがその手段を防がれた。迂回するにも源流の街ソーシアを経由しなければグロリアスにはいけない。異変に気づいているのはこちら側だけで完全に分断されてしまっているのならば、これはもう手の打ちようがない。

「どうする…どうする…」

クアッドがぽん、と手を叩く。

「強行突破は作戦に含まれませんよ」

ダイキがすかさずクアッドを「頭の弱い残念な子」を見るような

視線で眺めると、クアッドが肩を落とす。
「強行突破するつもりなの？」
「それしかないだろ。リーファ、装備換装してくれ」
「はいな」
リーファが目を閉じると、何かの詠唱を始める。
「魔術理論導入された鎧ですか…？」
「そういうこと」
ダイキが頷くと、リーファがにこりと微笑む。
「行きます」
「あー」
クアッドにリーファがゆっくりと右手を差し伸べて、ぽん、と人差し指でクアッドの額に指先で触れる。クアッドが空を仰ぐと、つぅ、とリーファが指先を額から鼻の頭、唇の上、喉、胸と滑らせる。
「なんかエロくない？」
リレインが頬を赤くすると、ダイキが苦笑する。
閃光が二人を中心に発生して、ダイキとリレインは思わず目を閉じる。
「完了です」
「魔術機甲甲冑の装備を確認。異常なし」
真っ青なフルプレートアーマーを装着し、頭にドラゴンを模したようなヘルムは左目を覆うようにガードが着いている。
「全身、甲冑で覆ったりと大仰しいですが…重たくないんですか？」
ダイキが唖然としてクアッドを見ると、クアッドが親指を立ててみせる。
「実はこれ、普通の服着ているくらい軽いんですよ。まぁ見た目が派手なんでいつもは着用していないんですけど、ね」
「あとこれを使用するのは王国から禁止されちゃったんで、あまり使うことはないと思ってたんです」
リーファがてへ、と笑う。
「にしては余計な…装飾が目立ちますけど」

「これはリーファの趣味だしな」
クアッドが身体を見下ろす。肘や膝の部分に無駄に尖がった部品がついていたりする。
「腰に下げている剣は何ですか？刀身がありませんね」
「これはね」
クアッドが左右に腰に装着されている短い棒のようなものを握ると「ぶぅん」と輝く刃が伸びる。
「レーザー兵器」
ダイキが小さな声で呟くと、リレインが目を丸くする。
「まぁ色々装備品が多いんだけど、全部リーファの魔力を使ってるからあまり無理はできないんだ。ちょっくら街を見てくるとしよう」
クアッドの背面から三対六本のウィングが飛び出して、足の裏、腰、肘、背中から淡い光が収束すると、それが一気に噴出する。
どんっと地面を蹴っ飛ばすような音と同時に文字通り空を飛んでいくクアッド。
「クアッド、無理な戦闘はしないように。市民を巻き込むことはあまり気が進みません」
リーファの声が鎧越しに聞こえてくる。これもこの鎧の便利な点だ。
「了解した。とは言え、ほとんどの住民は外にすら出てないな。あの緑色の服を着た連中が街の至るところにいる。つーかこの街、あまり大きくないよな」
断崖絶壁を背にしている街なので、通路の間に家が立ち並んでいて宿などが並んでいるだけの街だ。
「着地して、敵性勢力を潰す」
「はいな」
高さ十八メートルから滑空して地面を滑るように高速移動しつつ、兵士たちを二本の剣で通り過ぎざまに斬る。相手は何が起こったのか理解できないまま、そのまま崩れていく。
レンガ造りの道路がクアッドの一歩で大きく抉れて、形を崩し、

十メートルを秒単位で駆け抜ける。
「偉そうなおっさんがいる」
「強行しましょう」
クアッドは頷くと、その男の首をはねた。
長さ二百メートルの街道沿いの街の通路が全て赤く染まった。
クアッドは街の出口に到着して、くるりと振り返る。
「クアッド、高魔力反応、上」
言われて頭上を見上げると、閃光がクアッドの前に降り立つ。衝撃と風圧でクアッドが腕で顔を覆うようにして隠す。
「魔術機甲甲冑？まさか…」
「はぁ？」
クアッドは女の声に相手を見ると砂煙が消えてその姿を確認した。赤いフルアーマーでクアッドよりも身体にフィットするように作られているのか、女性であることがわかる。フルアーマーとは言いようで鉄製のブーツ…クリーブのようなものを履いていて大腿部が見える上にスカートのような短い腰巻のようなものを装備していて、見目女性であることはわかる。五指ガントレットは肘までで、二の腕も露出しているためにその防備性は疑われるが、見た目重視の装備であることは一目瞭然だった。
「魔術機甲甲冑…お前のもか？」
クアッドが尋ねると、顔面を全て隠している相手がゆっくりと頷いた。
強い…な。
とりあえず戦闘か。
クアッドはサーベルをオンにするとぶんっと刃が現出すると相手も同じようにサーベルを抜いた。
「ライトアーマーだとしんどいわ」
ばしゅっと音がすると少女の甲冑がパージされてさらに露出部分が増える。脚部、腕、胸だけをガードする形で残った甲冑の断片。
「え？うそぉん」

クアッドが思わず呟くと、碧眼の美しい少女がその長い青い髪の毛をはためかせて、クアッドの眼前に迫った。状態を仰け反らせて横薙ぎを交わす。熱風のような剣戟が鼻先を掠める。
「待て！待ってくれ！いえ待ってください！第三王女！」
クアッドが片手で制すると、背後に回り込んだ少女が剣の切っ先をクアッドの後ろに突きつけていた。
「俺は…君主に対して向ける剣を持ち合わせては居ない」
「…お前、クアッドか？クアッド・アルマーティー？」
「はい」
クアッドが魔術機甲甲冑を解除すると、少女も魔術機甲甲冑を解除した。
「クアッド…」
後ろからぎゅっと抱きつかれてクアッドが苦笑する。
騎士王女、スティラ・シュバイツ。名実共に剣術において右に出るものはいないと称された騎士の中の騎士。十四にして既にその剣術は完成されていると称され、クアッドと共に戦ったことのあるかわいらしい少女は今年で十六になる。
「クアッド、まさかソーシアに駐留してるアーミルスの軍人をもう片付けたの？」
「ああ」
クアッドが立ち上がると、くるっと一回転してスティラと向かい合う。
「ディム・スティラ。ご無沙汰しております」
騎士の正式な挨拶をするために跪くと、スティラがぽんとクアッドの肩に手を置いた。クアッドが立ち上がると、またクアッドの後ろからスティラが抱き着いた。
「ディム・スティラ？」
「ディム・スティラだ」
リレインとリーファが目を丸くすると、ダイキがこそこそと建物の影に隠れて逃げ出す。

「リレインさんとリーファさん。お久しぶりです」
スティラに言われて、二人も正規礼をするとスティラがうなずく。
「どうしてここに？」
「下流の街の変貌を聞いて私が軍を率いている。まぁ私は魔術機甲甲冑があるから早く着いたんだが、アーミルズ軍を既に片付けられているとは思わなかったよ」
スティラがクアッドの頭をぽんぽんと叩き、クアッドが苦笑する。
「クアッド、貴様には勲章をくれてやる。ダイキ！」
急に声を張り上げて三人が驚くと、ダイキが顔半分だけ建物からこちらを覗くようにさせて見ている。とてもいい大人のすることではない。
「わが国最高の軍事顧問が何をしているかと思えば…なんだその姿は」
「これですか？」
袴姿を見せ付けるようにして物陰から出て来るダイキに、スティラがため息を吐く。
「ダイキに伝令を伝える。我が軍に合流せよ。騎士団長もその旨を了承している」
「残念ながら姫さん、私には力不足ですよ」
ダイキがすっとぼけるように言うとスティラが「そうだろうな」と呟くとにやりと笑った。
「いいのか？中央に居る昔の女がお前のことを探しているんだが、そのことを騎士団長に言うか？」
「…」
ダイキはしこたま嫌そうな顔をしてみせる。
「だからあれはそういうものではなくて、ですね」
「私は構わん、お前がどんなに否定しても騎士団長の妹君はどう思うか」
「…」
ダイキは頭を抱えて小さくなる。クアッドとリーファは顔を見合

わせると嫉妬深いダイキの嫁の姿を思い出して苦笑した。
「とりあえず、報告ですかね」
ダイキが今までの経緯を話すと、スティラが険しい顔をしてその内容を聞いていた。
故郷の村の襲撃事件、ハイラインの行動の二つが大方だが、スティラは目を閉じる。
「我が帝国はこの川を最終防衛ラインとすることが帝国議会で発表された」
「へ？」
クアッドが思わぬことを言われて目を丸くする。
「アーミルズは思ったより戦力を拡大させていてな。クアッド、リーファの二名は国内の内陸部に戻って欲しい」
「了解です」
クアッドが簡易敬礼すると、リーファがじろりとクアッドを見る。
「で、ディム・スティラ。いつまでクアッドに抱きついているんですか？」
「…私のものに何をしようと関係ないだろう」
クアッドは後頭部に当たる幸せな弾力を感じながら鼻の下を伸ばしっぱなしにしていた。
国の騎士は全て国民のものであり、それは王家の至宝である。故に言い方はずい分齟齬があるが、間違いではない。
ぎゅうっと抱き締めるスティラにクアッドが嬉しそうに笑っている。
「姫、成長しましたね～」
「そうか？私もそう思うが、騎士をやっていると色々と不便だ」
「ぐぅ」
リーファが親指の爪を齧って、呪い殺すような目でクアッドを睨む。
「クアッド、お前の相方はどうしてああ、何というか心の狭い女だ」
「姫、はしたないですよ」

リレインは今にも魔法を乱射しそうなリーファに変わって、クアッドとスティラを離すと、スティラは不満そうな顔をしている。妙に子供っぽい、いたずらっ子のような顔をしているが、その横顔も妖艶でドキッとする。

クアッドはどぎまぎしていると、リーファがクアッドの手を握った。

「クアッドは私のです」

「お」

ダイキが面白そうに声を上げると、リレインも驚いた。

「宮廷魔術師の分際で何を偉そうに。騎士は全て私のものだぞ」

「じゃあ他でもいいんですよね？クアッドは私がもらいます！」

「いや、他のものは好かん。私はクアッドがいい」

「わがままです、横暴です！身勝手です！」

「うるさい小娘だ」

スティラがふっと立場の違いからか鼻で笑うが、あんたも同い年の小娘だろう、とクアッドは喉まで出掛かってそれを飲み込む。

「姫！ディム・スティラ！勝手な行動は自重してくださいと言っているでしょう！」

二十後半の男が走ってやって来ると、スティラは煩そうな犬を見るような目でその男を見た。

「何だクロイツ。騒々しい」

クロイツと呼ばれた男はぴっとスーツを着込んだ、如何にも細かそうな男だ。めがねをくい、と上げて「はぁ」と嫌みったらしく聞こえるようにため息を吐く。

「お、陰険クロイツじゃないですか」

「な！」

ダイキが「やぁ」と気楽に手を当てると、クロイツは咳払いして、そそくさと逃げるようにしてその場から去っていく。

「クロイツを軍師として同行させているんですか？」

「ああ、あいつは悪知恵が働くからな。お前ほどではないが」

ダイキは言われてにこりと爽やかに微笑む。
「わーい、褒めらいちゃいましたよー、クアッド」
「俺に振るんかい」
クアッドが頭を抱えると、リレインは面々の顔を見て首を傾げる。
貴族でもない普通の人間が、立場の違う人間にどうして顔と名前を知られているのか興味を持った。
「とりあえずクアッド、お前は守護騎士などやっておらんで宮廷守護騎士になれ。私の側にいろ」
「だめです！」
スティラがさらっと言うとすぐさまリーファがぐいっとクアッドの手を引いて、大切なものを守るように抱き締める。
「クアッド？」
スティラが上目遣いで潤んだ瞳を浮かべてクアッドを見上げるようにすると、クアッドがたじろぐ。
「城で私を押し倒しただろう？忘れたとは言わせないぞ？」
「ええ、まぁ」
クアッドが困ったように答えると、リレインとリーファが信じられないような目でクアッドを見る。
「相変わらず鬼畜ですね。あなたは。美しいものには目が無いんですか？」
「いや、うん、暗殺されそうになったところを押し倒して助けたってことなんだが…」
クアッドはため息を吐くと、リレインが「なるほどー」と呟く。
「…私だってクアッドとは色々あるんですから！」
「ほう？」
スティラが勝ち誇ったように笑む。
「お医者さんごっこだってしたんですよ！」
「ぶふー」
クアッドがリーファの胸の中でもがくと、リーファが離すまいと力を込める。

「クアッド、あんた一体…つーかクアッドって、中央でも色々と勘違いされるようなことしてたのよね」
「ほうほう、興味深いですね」
リレインにダイキが瞳を光らせる。
「街のほうの遺体は収容しました」
そこにクロイツがやって来て報告する。血のついた壁や通路、アーミルズ軍兵士の遺体が次々と片付けられていった。
「…これはどういう状況ですか？」
「見て分からない？」
リレインが苦笑するとクロイツはクアッドを奪い合うようにして引っ張っているリーファとスティラを見て首を傾げる。
「ダイキ、説明を…」
「我が王国は一夫多妻制じゃないのがそもそもの原因かと」
「あ…あぁ」
クロイツは左手を額に当てると大仰に空を仰いだ。
「クロイツ、貴様に軍を預ける。私は一度王都に戻るぞ」
「はい？」
突然言われてクロイツが表情をあまり変えずにスティラを見る。
「軍を預ける。私は王都に戻る。クアッドと一緒にな」
「それは困る」
クアッドが疲れ切ったように言うと、リレインが「だろうねー」と呟く。唯でさえ収集が付きそうにない状況なのに、第三王女スティラまで同行とあってはどう事態が転ぶか、わかったものではない。
「私も一応騎士団長に会わないといけないので…」
「ダイキ、面白いものが見れるからって…後でどういう風になったか教えてくださいね」
「ええ、もちろんですとも」
クロイツとダイキが「ふふふ」と笑んでクアッドを見ると、クアッドがついに力尽きた。
ダイキとクロイツは互いに嫌悪しているようだが、その実、気が

合うのではないか？とクアッドは疑問を持った。
「最後の良心は私だけですか…」
もう、泣きたい。
リレインはぐっと涙を堪えて、一気に騒々しくなったパーティを眺めて、ため息を吐いた。
日没を迎えて、軍隊の半分がハイラインの治めていた領地に向かう。罪状は言い渡されないが、戦死したハイラインの変わりに別の指揮官がそこに駐留して、領地は国営に戻されることになる。スティラの配慮で全てがお咎めなし、彼は英雄として死ぬことになる。
クアッドたちは軍の拠点に移動して、一晩を過ごすことになる。
「リーファさんってあんなに喋る人だったんだね」
クアッドが焚き火の前に座っていると、後ろからリレインが近付いて来た。山間部の夜は冷える上に、ここは川の源泉で湧き水が出ている場所でもあるために湿度も高く、夜になると濃霧になって視界が途端に悪くなる。そのために篝火を至る所で炊いているので、そこから火を拝借してクアッドが座っていたのだった。
「あー、リーファはよく喋るほうだと思うぞ。まぁいつもは余計なことに集中してるから、口数も減るんだろうけど」
「余計なこと？」
リレインが首を傾げると、クアッドが頷く。
「魔術師連中ってぼーっとしてる奴多いだろ？」
「あー。言われてみれば」
何処と無く心ここに在らずという感じがして、不気味でもある。そういう面ではリレインは魔術師たちがあまり好きではない。
「あれは世界中のマナの流れを見て、常にそれをどう利用するか考えてるから、なんだと。そっちのほうにばっかり意識が流れてるから、あまりこっちのことは見えてないって言うか…そんな感じなんじゃないのかな」
「つまり、魔術バカ？」
リレインの言い方にクアッドは苦笑すると、そうかもしれない、

と思った。
「リレインは魔法騎士のほうが向いてたんじゃないのか？」
クアッドはふとそう思って口にすると、リレインがすとん、とクアッドの隣に座った。
「あんたも私も適正が足りないって言われたじゃない」
「俺は適正が足りないんじゃなくて、全く無いって言われた」
クアッドが否定すると、リレインは「あら」と呟く。
「簡単な魔法なら使えるリレインと違って俺は騎士っていうより剣士上がりだからな。どっちかって言うと向いているのは弓兵のほうだし」
「あの射的はすごかったけどね。でもあんたはやっぱり騎士が向いてるよ」
「ん？根拠のない応援だな、それ」
クアッドが眉を顰めるとリレインが丸くなる。
「二年間の士官教育を受けるとき、あんたが私を励ましてくれたから、私卒業できたんだけどなぁ」
「それは興味深いですね」
「出た！」
ダイキがひょっこりと霧の中から姿を現して、どっこらしょっと焚き火の向こうに座る。
「ひどいですねぇ…人の幽霊か何かみたいに」
「それよりも性質が悪いわよ」
リレインがため息を吐くとダイキがくすくすと笑う。
「ねぇ…そう言えばクアッドはどうして中央に出てきたの？騎士になるんだったら別に地方でもよかったんじゃないの？」
リレインに聞かれてクアッドは「あー」と思い出すように火を見つめる。
「俺は…田舎で育てられたんだけどさ。今はない村になっちまったけど、本当に何も無くてさ。つまんなかったんだよね。食い物だって毎日自分たちで調達しなきゃいけないし、冬になると雪で真っ白

になっちまって、家の中でじっとしてるしかない。退屈だったんだろうな」

「へぇ…地方じゃ珍しくないしね。この国はどこでも雪が降るし」

「まぁね」

クアッドは火に棒を突っ込んで、炎が消えないようにする。

「まぁ、そんな場所だったから、都会ってすげーとこなんだろうなぁって思ってさ。俺が村を出るときにリーファも着いて来たんだ。俺たちは親がいなくてさ、村で育てられた。恩返しするには騎士や魔術師として何か成し遂げて、凱旋して、村をもっと便利で豊かにしようと思ってね。俺は剣を師匠に習ってたし自信もあった。リーファも魔法を師匠に習ってたから、着いて来たんだ。まぁ詳しいことは知らない」

リーファが着いて来た理由は良く分からない。

「王都に着いて事件に巻き込まれて、リーファの魔法資質に気づいた宮廷魔術師団の上野人がリーファを専門学校に入学させてさ。俺は試験を受けたら、士官教育分野で師匠から教えてもらったことがテストに出されて、受かっちまった」

「ダイキって何者？」

リレインがダイキを細目で見ると、ダイキが首を傾げる。

「クアッドは、士官学校入学以来の好成績を残してるのよ。入学テストで満点だったんだから」

「ほぉ、それはすごい。あの難関問題を解いたんですね」

白々しい物言いにクアッドは苦笑する。ダイキの性格を知っているから、小馬鹿にしているわけではない。

「俺は師匠が元王国軍の軍師だったって話を聞いたときに、やっぱりって思ったけどな」

「その話は古い話ですから、置いておきましょう」

ダイキがぱたぱたと手を振ると、クアッドは頷く。

「まぁ俺はさ…子供のころの記憶が余り無くて、村で聞かされたのは俺が十のときに村の近くで倒れてたってこと」

「へ…ぇ」
リレインが何と言っていいのかわからないように、口を噤む。
「ここから」
右の鎖骨辺りにクアッドが左手を当てる。
「ここまで」
左下わき腹まですっと手を伸ばす。
「胸から腹にかけて大きな傷があって、斬られた後が今でも残ってさ。俺が見つけられたときは虫の息だったらしいぜ？」
クアッドが人事のように言うと、リレインは目を細めた。
「噂で聞いたよ。クアッドの胸には悪魔に切られたような傷があるって」
「はは…ガキの頃の傷だから、成長すればそれもデカくなるっての」
クアッドが一笑すると、リレインが「そうね」と俯く。
「俺が覚えてるのは、必至に逃げてたこと」
「何から？」
「わからないよ」
クアッドが答える。
「記憶にあるのは、後ろから抱きつかれてさ。頭から何か暖かいものをかぶったんだ。暖かい液体。それが視界を真っ赤に変えて、血だって気づいた。後ろから守るように抱きついてきた人が母親で、母の身体から冷たい切っ先飛び出してきた、それが滑って俺の肩口に突き刺さったんだって気づいたときには、俺は倒れてて、目の前に母親が目を閉じて動かなかったことだけかな」
力なく倒れてくる母。大人の身体を支えることは叶わず、背中から倒れた。
母がその白い手を自分の手に重ねて、力なく握り…。
「あー」
その後の記憶が無い。
「…さて、夜も深くなりましたね」
ダイキが立ち上がると焚き火の火を消す。

「戻って休みましょう？」
「ですね」
促されてクアッドが立ち上がると、リレインも立ち上がった。
「あんま聞かないほうが良かったかな？」
「別に」
クアッドが大した事じゃないと笑うと、リレインが「あっさりとしてるのね」と苦笑する。
「俺は今でも奴の顔を覚えてるんだ。左胸に十字の刺青のある男さ」
「探してるの？」
「いないよ」
クアッドがにこりと微笑む。
「え？」
「俺が殺したから」
リレインが耳を疑った。
「殺したのさ。母に刺さった剣を引き抜いて、奴を貫いたよ。呆気無かったなぁ。死んだ、もろい。長く生きてくれれば俺も復讐のために追い続けられたのになぁ…」
無表情に言われて、リレインは一歩後ろに下がる。ぎらぎらと瞳が光っている。
「心臓に一突きさ。半分くらい剣が突き刺さってね。少し力を入れるとすっと剣が吸い込まれる見たいに飲み込まれていくんだ」
「…クアッド？」
ダイキがクアッドの様子の変化に鋭い視線を送る。
「あと少しで全部刺さるかな？ってトコで剣が動かなくなってさ。だから抉った。あいつは口を半開きにさせてね…そこから血が溢れたんだ。母と同じ暖かい血が剣を伝わって俺の手を汚した。汚かった。なんで同じ血なのに、こんなに汚いんだろうって思ったよ」
くすくすとクアッドが笑う。
「でも気にしなかった。俺には聖なる洗礼を既に受けていたからね。母親の血で洗礼を受けた俺はどんな穢れた血でも気にすることは無

かった」
　ふっとクアッドが目を閉じると、後ろに倒れる。
「ちょっとクアッド！」
「大丈夫ですか！」
　リレインとダイキがクアッドをベッドに運ぶ。まさか急に倒れるとは思わなかった。

　すぅ、すぅと寝息を立てるリーファを見下ろして、スティラがリーファの身体を揺する。
「なに？」
　リーファが敵意丸出しでスティラを睨む。一国の王女に対して向ける視線ではないが、そんなのは兄弟たちからいつも向けられているから気にはならない。
「クアッドが倒れちゃった」
　焚き火の周りで何やら話をしているのを、偶然聞いてしまった。かわいそうな少年の話を聞いて、リーファの境遇も偶然聞いてしまって居ても立ってもいられなくなったのだ。
「クアッドが？」
　リーファが「大変」と起き上がると、スティラがその話を聞いたことを話すと、リーファがきょとんとする。
「ごめんなさいね。貴方たちは自由気ままでそんな昔話があったなんて知らなかったけど、苦労したのね」
「苦労はしてませんよ」
　リーファが面倒そうに答える。
「だって、私たちは十分幸せです。自由気ままで、小うるさい使用人も教育係もいませんしね。ひ・め・さ・まと違って？」
　嫌みったらしく言われてスティラが顔を顰めるとリーファが苦笑する。
「とりあえず、クアッドのところへ行って見ましょう」

「あなた一人に任せられませんね。動けないクアッドに何をするかわかったものではありませんし」
「しませんよ。心は繋がってるんです」
「…くっ」
スティラが悔しそうな顔をすると、リーファが歩き出す。
「ま、待ちなさい！宮廷魔術師だったら私を後ろから守りなさいよ！」
「今は私、女という仕事ですから」
「ちょっとっ！だったら私も…っ！」
二人がテントの前に近付くと、気配を消す。
中にクアッド以外に誰か居る。
リーファとスティラは息を殺すと中から声が聞こえてきた。
「驚きました」
眠っているクアッドを見ながら、ダイキが口を開いた。
もう戻って休みなさい、と言ったがリレインは倒れたクアッドが気になって自分のテントに戻れずにいる。
「おどろいた？」
「ええ」
何を、どうして驚いたのかリレインにはわからないが、ダイキは思いつめた様にクアッドを見ている。
「左胸に十字の刺青。正しくは鎖骨の付け根というか、そこに装飾十字の刺青をしているのは」
「教会の粛清隊ですね」
リレインが心当たりを口にすると、ダイキが頷いた。
元軍師、ダイキ・ヒュウガ。この男は物知り程度ではなかった。
改めて認識したダイキという人物は騎士団長である父が認めるに足る人物でもあった。
「クアッドは粛清隊の十三番隊の隊長の息子でした」
「…」
粛清十三番隊。全土に広がる教会の中でも最も力を持つ部隊。彼

らが何を目的として動いているのか、それは教皇のみが知り、教皇のみが指揮を行える部隊。

「あなたのお父さんに聞けばいずれ分かることでしょうが…私は元十三番隊副隊長です」

「ダイキ…。粛清十三番隊副隊長…紅刃のダイキ…」

聞いたことがあった。教義に反する人間を舞うように屠り去る、哀しい瞳の副隊長の話だ。離隊後行方不明になっていた男でもある。

「私と離隊して、私はあの村に隠れて住んでいたんですよ。まぁ、家内が私を救ってくれたわけでしてね。隠居生活をしていました。そこに私に離隊命令を出した隊長が息子を守ってくれと連絡してきましてね。隊長もようやく人の世に出て来れると私は喜んだものです」

「だけれど…クアッドだけが…送られてきたと？」

「そうです」

ダイキが頷くと、リレインはゆっくりと頷いた。

「私にそれを話して、教会内部の諜報活動を行うように仕向けてどうするんです？」

「はっはっはっ、君は察しがいい」

ダイキが試すような視線をリレインに向けると、リレインは苦笑した。

「昔から直接物を言われないような環境で育ったものでしてね。私はそう言う面倒な人たちに好かれるようです」

父が父であり、その娘であるから強く言えない汚い大人たちの物言いなど、生まれた時から今までも変わらず、遠まわしな言い方として聞いてきたのだ。それくらい分からないほど子供でも、無知でもなかった。

「あえて君はそれでも私に質問し返した。利巧ですね」

「褒められている気がしないけれど、あなたなりの褒め方だってようやく気づきましたよ」

リレインが呆れて見せて、ダイキは満足そうに頷く。

「理解って頂いて光栄ですね。それでは理解し合えた記念にこれを渡しておきましょう」
　何の記念なんだか、とリレインはダイキが懐から取り出したネックレスの先に着いたペンダントを受け取る。
「教会内部のマスターキーです」
「なぜそれを？」
「私は十三番隊の元副隊長ですから、不名誉除隊されたわけではないのでＯＢとして内部に入ることが出来るんですが、今回は少しクアッドの側にいてやらなければならない」
「親心、って奴かしら？」
　親心、とは違うが、ダイキはうなずいた。
「でも小娘の私がこれを持っていては怪しまれるでしょうし…」
「君ならば大丈夫でしょう。それくらいの技能は身につけているはずだ」
「知っていらしたの？」
　リレインが尋ねると、ダイキが頷いた。
「ファルバングの側にあなたは側近として変装して立っていた。あれは教会の連合軍ですからね」
「はは…あなたを追い掛け回したことは謝罪します」
「あと、村の様子を知らない振りして私たちを謀っていたこともですよ。知らない振りしてあなたは私たちに村の様子を尋ねた」
「…ばれているとは思わなかった」
　リレインは「残念」と舌を出してみせる。
「リレイン君。国の裏側を見てどう思いますか？」
「…歴史を疑うわけにはいかないね」
　リレインは正直に答えると、ダイキはため息を吐いた。
「クアッド君、リーファ君には話すべき時が来るでしょう。それまでは私とあなただけの…スティラ様にも内密に」
「ディム・スティラ、本件の事はご存じない？」
「彼女は王家の中でも嫌われていますからね…。国王とその使用人

の間に出来た子です。国王が良き心を持っていたので、庶民であった使用人が女王の冠位に付きましたが…やはり宮廷内でも立場がないのでしょう」

「そう…だったんですか。私はそういうの気にしませんから、よくわかりませんでしたけど」

スティラも奔放な表向きとは裏腹に苦労しているのだろう、とリレインはクアッドの横顔を見る。

「さて、私はつまらない昔の話をするほど、年を取ってしまったようです。ちょっと夜風に当たってきますね」

「はい。戻って来るまでクアッドは私が見ていましょう」

リレインが言うと、ダイキがにやりと笑う。

「くれぐれも…スティラ様やリーファ君みたいにクアッド君に手を出さないように」

「しませんっ！」

リレインが顔を真っ赤にして反論すると、ダイキはくすりと笑って外に出る。

四章　近付いてくる過去

「いけない子たちだ」
ダイキは回り込んでテントの脇に移動して見下ろすと、二人が膝を抱えて頭を抱えるようにして隠れている。
「よっこらせっと」
ダイキが手を伸ばして二人の襟首を後ろから掴んで、そのまま跳躍する。
人間の能力では在り得ないほどの跳躍をして、山道を駆け上がる。
「う…うわわわわっ」
「ダイキ！何をっ！」
二人がじたばた暴れると、ダイキが二人を放り投げる。
「うわあああっ！」
「後で軍事裁判にかけてやるっ！」
宙に投げ出されて二人が瞳に涙を浮かべる。
ダイキは放物線を描く二人の舌に回りこみ、腰に手を回して小脇に抱えると更に速度を上げる。木の枝をすり抜けるようにして、木の間を駆け抜ける。
断崖絶壁を両足だけで蹴り飛ばして二十メートルはあろう壁を駆け上って、ダイキは二人を下ろした。
「ここは晴れているんですよ」
にっこりとダイキが微笑むと、絶壁の下は雲がかかっているように街が霧で覆われていた。頭上に満月が二つ。
「殺戮を生き甲斐とする哀しい集団には成って欲しくない」
「ダイキ？」
スティラがダイキを見ると、ダイキがどっこらせっと岩の上で座り込む。
「今宵も月が綺麗だ」
そういうダイキを中心に二人も座る。

「クアッドの話を聞いてしまいましたね？」
「聞かせた、の間違いではなくて？」
スティラが「間違っていましてよ？」と呟く。
「ええ、まぁ。リーファ君は知っていることですから、主にあなたに聞いていただきました」
「曲者ですね、相変わらず」
リーファがそのやり口が気に入らないらしく頬を膨らませる。
「片方だけが知っているだけでは、恋の好敵手であるスティラ姫が不利でしょう？やっぱり戦いはフェアでなければ」
「余計なお世話です」
スティラが憮然と呟く。
「ですが、今回ばかりはそうも行かなくなってきた。いつものような事件とか災害であるならば、私は貴方たちがどんな行動をしようとも、そこで誰かが死んでしまっても構わないと思っていた。それが運命ですから」
さらりと、とんでもない事を言われた気がする。リーファはいつものダイキ節に慣れているので特に気にはしないが、スティラは思い切り不満そうな顔をしている。
「若い身空でずい分と物事を知っているような言い方をするのね」
「ええ、若いと言えども貴方とは十近く、離れていますし」
それに…とダイキは街を見下ろす。
「貴方の何百倍かは、人の命を奪っています」
ダイキの言葉に二人は何も言えなくなった。
「いいですか？人の命を奪っていけば、自分がどんどん人ではなくなっていく。私はそんな気がした。殺戮だけが生き甲斐になってしまう。それは間違いだ」
「私が…私たちがそうなると？」
リーファが首を傾げると、ダイキは首を横に振る。
「あなたたちは大丈夫、あなたたちは産み、育てることを許されているから」

リーファとスティラは自分の下腹部を手で抑える。いつかは好きな人と結婚して、子供を生み、そして育てるだろう。それは女性に生まれたからこその幸せでもある。

「男はそうは行かない。生きていく上で他者、人であれそうでなかれ、命を奪ってただ自らの生を繋ぐ、繋ぎ続ける。誰かから奪うことで自分の生存を立証し続けるのです」

「それは間違っています」

スティラが断言して、リーファが頷く。

「どうでしょうか。そうでしょうか。私は…家内と出会うまで気づきませんでしたから…男とはそう言う者なのです。気付かせてくれる人が居なければ、知らないままで朽ち果てて行く。何も残すことができずにね」

「なぜ、私たちにそんな話を？」

リーファが尋ねるとダイキは苦笑する。

「クアッド君に気付かせてあげられるかもしれないからです」

「？」

スティラとリーファが顔を見合わせる。

「彼は驚異的に…心のどこかが壊れてしまっている」

「自分の教え子を精神異常者のように言うのはよくないんじゃない？」

スティラが抗議すると、ダイキは苦笑した。

「そうですね。そうなんです。でも彼は…強すぎるからこそ、分かり合える者がいない」

リーファはそう言われてはっとした。

強すぎると、忌み嫌われる。あの子は特別だから、と除外される。宮廷魔術師の魔術学校でもそうだった。強すぎる孤独はそうある者にしかわからない。

スティラも同じ思いをしていた。

異端の子だった。だからこそ剣を握った。剣を振るっていれば嫌なことを忘れられた。今でこそ騎士王女などと呼ばれているが…最

初は騎士王女と呼ばれることすら嫌味でしかなかった。兄弟たちからは疎まれて、兄に剣で勝った時は寂しさしか残らなかった。雄一自分に剣を教えて理解してくれた兄が、上回った瞬間から冷たくなった。

「他人より秀でている事は、必ずしも幸せであるとは限らない。自然と求めるのですよ、自分よりも強き者を…まるで破滅を望むようにね」

血塗られた道だ。

強き者を求めて歩き続け、その道の上にいる強いものを屠る。もっと、もっと…その先にあるのは何かは行く者にしかわからないだろう。だけれども…通り過ぎた後には夥しい鮮血と死体が転がっている。いずれ、己を振り返ってそれを眺めて…人で居られるのだろうか。

リーファとスティラはぞくっとした。全身に悪寒が走った。

少なくは無い。

今ですら自分が蹴落として来た人数は少なくは無かった。

「スティラ姫は同じ騎士として、リーファ君は魔術師として、道は違えど強き者の道を例外なく歩いていると私は思っている。だからこそ…クアッド君を救って欲しい」

「師匠にはできないんですか？」

その話ならば、ダイキはずい分先を歩いているのではないか？とリーファは思った。

ダイキは哀しそうに微笑む。

「できません。男ですからね。男同士は…それができないんです」

いずれ私も……のかもしれませんね。

予感がする。

そんな予感。

「正直な話、リーファ君がクアッド君を好きなのを知って安心しました」

「別に好きなわけじゃないんですよ！」

あたふたとするリーファにスティラが「へー」と呟く。
「じゃあ私に頂戴」
「それです！頂戴、とかあげる、とかいう話じゃないんですよっ！クアッドはモノじゃないんですからっ！」
「言い訳くさーい」
スティラが流し目で呟くと、リーファが言葉を詰まらせる。
「まぁそういう喧嘩は私がいなくなってからでも」
ダイキが苦笑すると、けしかけたのは誰よ？と二人が睨みつける。
「降りましょうか？」
ダイキは二人をまた小脇に抱えると、跳躍する。
「っ！」
二人が息を呑むと、ダイキは音も無く着地するとまた、夜の山間部を失踪する。

ひどい目に合った。
スティラは髪の毛を梳いて、櫛を鏡の前に置く。
野営地のテントと言えども自分だけ特別に様々なものが運び込まれるのだから、リーファと共に使用している。ベッドに寝ているリーファはあんな暴走行為に無理やり連れまわされたのに既に眠っている。
「髪の毛くらい梳きなさいよ」
仕方ないわね、とスティラがベッドに腰掛けてリーファの頭を腿の上に乗せて髪の毛を梳いてやる。
「女の子なんだから、さ」
「ですよね…」
「起こしちゃった？」
「いえ」
リーファが目を開け、スティラが櫛を通してやると猫のように気持ちよさそうな顔をするリーファに思わずスティラは微笑んでしま

う。
「姫は王都に戻られるんですよね」
「仕事の話？まったく、あなたの頭の中は魔術と軍のことしかないの？出世しそうね」
スティラに言われて、リーファは困ったような顔をする。
「そうね、王都に戻るわ。軍は他の将軍も一緒に連れてきているし、クロイツもある程度の戦術を考えたら王都に戻るように指示を出してある。そもそも私、指揮官みたいな言われ方してるけど、魔術機甲甲冑装備者だから、単独で突撃しろって言われているようなものなのよ」
「そうなんですか」
「そうなんですよ」
はい、終わり、とリーファを寝かせてスティラは櫛を鏡の前に置くと、ベッドに入る。
いつもは広すぎるベッドなのに、もう一人居るだけでずい分と狭く感じるものだ。
「貴方たち、不思議よね。私が王女って知っても臆せずに突っ掛かって来るんだから」
「敵は権力だけじゃなかったもので…」
リーファの物言いが何処か可笑しくてスティラは苦笑する。
ふっとランプが消されて暗くなる。
「私の近衛隊にならない？」
「宮廷魔術師である以上、近衛隊には変わりないですからねぇ」
「生意気言ってるわね。そういう意味じゃないのよ」
「どういう意味かしら？」
ごそごそと寝返りを打つリーファ。二人の顔が息遣いがわかるほど近付く。
「私の近衛隊ってみんな嫌うのよ。お母様がお母様だからね。庶民と王の間に生まれた王女の近衛隊って出世できないって思うでしょう？」

実際、危ない任務ばかりで騎士として動き回っているのだから、余計に嫌われるのだ。そんな王女の近衛隊など…進んで引き受けるものなどいない。

変わり者、クロイツは進んで引き受けてくれるのがスティラにとって唯一の救いだった。クロイツはその人望から部下も進んでスティラを守ってくれている。今回の派兵でもクロイツの部隊が八割を超えているのも事実。

「同情を誘って私とクアッドを近衛隊に招集するつもり？」

「あなた…意外と性根の悪い子ね」

「ですよ」

ごろん、とリーファが背を向ける。

「私は女の子でもいいんだけどなぁ」

リーファは背筋がぞくっとして少し離れると、スティラが背後でくすくすと笑っている。

「何者ですか？」

リーファは上半身を起こすと、入り口に影。

スティラも上半身を起こして素早く半身を返して剣を手に取る。

「う？」

魔力が流れていく。

クアッドのいるテントのほうに自分の魔力が流れていくのを感じてリーファは目を細めた。

「賢者の梟は夜に舞う。その瞳は闇夜を見つめて何を思う」

ぽん、とリーファの指先が光ってスティラの背に触れる。リーファの視界に夜目が利くようになった。

『魔術機甲甲冑』

二人が同時に声にする。入り口に立っている影は真っ黒な機甲甲冑を身に着けている。

「我が痩身に、集いし戦乙女の祝福は、女神の深紅なりて…その剣は万端なる邪を切り裂くツルギなり！」

スティラが立ち上がると同時に魔術機甲甲冑を装備して、黒い男

に切りかかる。男は槍のような長い棒を握り、刃を輝かせる。スティラの横薙ぎの一閃を受け止めると、外に飛び出していく。リーファはローブを掴んで外に飛び出すとスティラの軍人たちが何事かと外に飛び出してきた。

「騒ぎになってしまったようだな」

低いくぐもった様な声で男が呟く。

「フィラン！」

「いけませんね…ローウェル、ここは引きましょうか」

ローウェルと呼ばれた白い甲冑がしゃなり、とクアッドのテントから出て来る。

「待て、お前たちは何者だ？」

スティラが尋ねると、二人は顔を見合わせた。

「いえ、我が国の王を迎えに着たんですが…ね」

ローウェルが背を向けると、機甲甲冑の背部が朽ちて、素肌が見えていた。

「お気に召さなかったようでしてね。日を改めて迎えに上がろうかと」

「ローウェル、喋りすぎだ。行くぞ」

「はい。フィラン兄」

ローウェルはぺこり、とスティラに向かって頭を下げる。

二人が空に飛んで、彼方へと消えた。

「フィラン・ロザリア、ローウェル・ロザリアの兄弟ですね」

ダイキがいつの間にかスティラの背後に立っていた。

「ロザリア兄弟？友好国の公爵家の兄弟がなぜ？」

グロリアスより東南に位置する隣国、シルヴァラン王国の王家に名を列ねる二人が、遠いこの地に赴いてきた理由がわからない。

「どうやら…クアッドは王様だったようです」

「？」

リーファが首を傾げると、ダイキもさすがに驚いたのか諮詢している。

「で、その当人はどうしているんだ？」
スティラがテントを空けると、クアッドはベッドに座ってこちらを見ると片手を挙げた。
「無事か？」
「ご心配おかけしましたよ」
「我がレディスト王国とシルヴァラン王国の間に深く関係しているようだけど、どういうことなの？」
尋ねられてクアッドは困ったように首を捻る。
「さぁ…行き成りお迎えに上がりましたって言われたけど、俺にはさっぱりですよ」
「そう」
スティラは魔術機甲甲冑を解除するとクアッドが目を丸くする。身体のラインが丸見えのネグリジェ姿のスティラが顔を真っ赤にする。
「…どぞ」
毛布をクアッドが投げるとそれをマントのようにスティラが羽織る。
「ゆっくり休んで…明日は王都に戻るぞ」
「了解」
クアッドがごろんと横になったのを見て、スティラが自分のテントに戻るとリーファが「お帰りなさい」と迎えた。
「クアッドのことだから、フィランとローウェルのことも知っているんでしょうね」
「だね」
リーファが頷く。
「クアッドはこれからどうするんだろう」
「クアッドが決めることだし…騎士職位返上もありえるかもね」
「却下するけど」
スティラが逃がしはしないと言わんばかりに断言する。
「私やクアッドは育ててくれた村に恩返しするために宮廷魔術師や

宮廷騎士に所属してるだけだったから、私は返上するつもりだよ」
「もったいないな」
正直にそう思う。リーファやクアッドほどの熟練者になれば職長クラスに二十歳未満で到達できるはずだ。
「もったいない、かぁ。私たちはたぶん自由なほうがいいよ」
「身勝手な話だな。戦う力を持たぬ者たちの剣となり、盾となる。そういう者がいるから他国の弾圧から守られている自由を、戦う力が在りながらそれを放棄するのか？」
「姫様らしいですね」
リーファが話は終わりだ、と言う様に毛布に包まる。
能力だけで駆け上がってきたクアッドとリーファをスティラは疎ましくさえ思える。何と身勝手で自由気ままで、欲しいものは何でも望めば手に入ったのだろう。その能力は人並み外れている。
だからこそ、知らないこともあるのだろう。
スティラはもやもやとした気持ちを抱いたまま、寝返りを打つ。
その日の夜は眠れそうにもなかった。

クアッド、リーファ、ダイキ、スティラが宿営地を出る。
リレインは一足先にパーティーから外れて王都グロリアスに向かったらしい。
「そんなに急ぐ必要あるのかね？」
「まぁ、人にはそれぞれ事情がありますからね。昨日の一件は特に、ね」
ダイキは観察するようにクアッドの横顔を見ると、クアッドはいつもと変わらずにダイキの意味深な視線に気味悪そうに一歩下がった。
「俺が王子だって？人違いもいいところだよ」
「でも王子様だったら、素敵だよね」
リーファが目を輝かせると、ダイキが頷く。

「リーファ君が王族に名を列ねるのも近いですか？いや…もしやスティラ姫とご成婚となれば…大陸二大王国が一つになりますね、これはめでたい」
スティラは茶菓されてもしれっとした顔をして前を歩いている。
「何かあったんですか？」
ダイキは食って掛かってきそうな発言をしたのに無視されて具合が悪いのか、リーファに尋ねる。
「さぁ、知りませんけど…姫様って我がままそうじゃないですか。その一環じゃ？」
「おいおい」
リーファが小生意気な口調でスティラに吹っかけると、スティラが鋭い視線でリーファを睨む。
「宮廷魔術師、口が過ぎるぞ」
「申し訳ありませーん」
スティラの強い口調にリーファがなおもふざける。クアッドはため息を吐くとダイキが苦笑する。
「これは何かありましたね」
「だな」
二人がこそこそと話をしていると、スティラが今度は男二人を睨む。
「軍師、騎士。男なら堂々と話をなさいな。性根の悪い井戸端会議の女のようでしてよ？」
「怒られちゃいましたね」
ダイキはほとほと困り果ててまた苦笑する。
「クアッドは我が国の騎士の称号を与えられた正式な家臣です。今更、王族だの何だの関係ありません」
「そんなこと言うと戦争になって、多面戦争が勃発しますね。クアッド自身がどうあれ、一度、シルヴァラン王国へその身柄を護送するほうが懸命ですよ」
ダイキがまともなことを言うと、スティラがぐっと言葉を詰まら

せる。
「クアッドが本当にシルヴァラン王国の王族だとしたら、です」
「本当も嘘も、シルヴァラン王国の公爵直々に動いているんですよ。向こうだって闇雲に突っ込んできたわけではない」
「ですが…」
スティラは流し目でクアッドを見る。クアッドは嫌そうな顔を隠しもせず、頬を引き攣らせる。
「私にはこの男が王族だとは思えない。気品も品性のかけらも無い。剣を振るい欲しいものを手に入れてきた蛮族と変わらない」
「それは言いすぎですね」
リーファが珍しく怒った顔をしている。と、クアッドは思った。いつもの笑顔なのだが、目が笑っていない。あれはリーファが怒ったときの顔だ。
「いくらあなたが王族で、王女であって、その騎士はあなたのものであろうとも、人格や品格までとやかく言うことはないでしょう？」
「それだから王国騎士は堕落したと言われるのだよ、宮廷魔術師。お前たちもそうだ。守られているだけで何もしない、暢気な歌を歌うことしかしない。宮廷魔術師の質も騎士の質と同様に年々悪化している」
こりゃあ、大変なパーティになったもんだ。
クアッドは二人が無言で睨みながら歩いているのを後ろで見ながら、ため息を吐いた。ダイキに至ってはもう既に我関せずという面持ちで、二人を止めようとすらしていない。
「師匠、源流ってどこなんだ？」
だいぶ狭くなってきた川を見て、ダイキに尋ねると、ダイキは「ええ」と頷いた。
「あそこに見える橋を渡ってしまいますから、本来は源流は見ることができませんが…もうちょっと上にある壁から水が湧き出していまして、そこが源流になっているんですよ」
「へぇ」

クアッドは聳え立つ山を見上げて、その雄大さに唖然とする。だいぶ上ってきたはずの山道なのに、まだ山道は続いているというのだ。

「絶壁から水が流れ出していまして、その水の量はとてつもなく多いんです。こう…壁から突然水が噴き出しているようにも見えますから、私も始めて見た時は驚きました」

「師匠ってどこでも行ってるよなぁ」

「経験ですよ、何事も」

いつものダイキ節にクアッドはどこか安心する。

「クアッド君、あれが橋です」

指を指されて三人がその先を見ると、大きな橋が対岸に向かって伸びている。

「全長四キロメートル、幅三百メートルの橋です。あれが完成する前まではあの山を登って降りなければなりません。もう一つのルートは時間をかけて、山の周りを一周するしかなかったんですよ」

高さ三千九百メートルの山を登って降りる苦労は計り知れず、その周回を回るとなれば悠に三日はかかるという、王国最大級の山だ。

「シュバイツ橋。二代前のシュバイツ王が建設した最大級の建造物です」

「へぇ」

ダイキの説明を受けつつ、四人が橋の欄干に辿り着く。

レンガで整備された舗装路は陸地とほとんど変わらず、その広さは安心かすら与えてくれた。今、自分の足元に大量の水が流れている、などとは言われなければ気付かないほど、安定していた。

リーファが恐る恐る橋の端から下を見下ろすと、水が轟々と音を立てて流れている。あの油泥で汚れた水はソーシアから流されていたらしく、ここでは綺麗な水が下流に向かって流れていた。

「はきゅぅ」

リーファが目を回すと、クアッドが苦笑してリーファの肩を抱き寄せる。

「怖いもの見たさって奴もわかるけど、水がダメなんだから覗くなよ」
「ですねぇ」
「ちょっと、ゆっくりしている暇はないのよ？」
スティラが声を張り上げて、二人を怒鳴りつける。
「申し訳ない」
クアッドとリーファがダイキとスティラの元に小走りで近付くと、スティラがさっさと歩き出す。
「…」
様子がおかしいのは気付いていたが、歩調がやけに早い。リーファはゆっくり歩くほうなので、自然と差が生まれる。
「何していますの？早くしなさい！」
「そんなに怒鳴るな」
クアッドが顔を顰めると、リーファの顔に汗がびっしょりと浮かび上がっていた。
ただでさえ、水が足元を流れているという状況で精神的に苦しいリーファにとって、橋の上とは言え、恐怖心があるのだろう。
「少し休むか」
クアッドが言うとダイキも頷く。
「休む？休むですって？」
ツカツカと足音を立ててスティラがクアッドに噛み付かんばかりの勢いで迫る。
「あー、ほら…リーファが…」
クアッドがリーファの顔色が悪いことを伝えようとすると、その異変に気付いた。
スティラの顔色も心なしか悪いし、唇が震えている。
「スティラ様、そこは崩れやすいかもしれませんから気をつけてください」
クアッドが地面を指差す。
「ひぃっ！」

がばっとクアッドは抱き付かれて、にやり、と笑った。そして確信する。
「スティラ…ひょっとして怖いのか？」
「なっ！」
スティラが騙された事に気付いてクアッドから離れると、ダイキが「ほぅ」と瞳を光らせた。
「水が怖いんですか？」
ダイキが尋ねると、スティラは首を横に振る。
「怖くなんか無い！ふざけるな！私は王女だぞ！」
王女であろうとなかろうと関係ないだろう、とクアッドはあえて突っ込まないことにする。
「あーっ！土砂崩れだ！」
ダイキが声を上げると、スティラがクアッドの後ろに回りこんで下流に隠れる。
「怖いんじゃねぇか」
クアッドが頭を抱えると、スティラがごすっと肘でクアッドの背中を打つ。
「ぐあっ！」
クアッドが背中を丸めてうずくまると、リーファがへたり込む。
「私は水が怖いんじゃない！こう…足元がおぼつかないというか…足の下に何も無いというか…」
「浮いているような状態が苦手なんですか？」
「そうだ、苦手なのだ。怖くは無い！」
スティラが顔を真っ赤にしてうずくまった。
「何だよ」
クアッドはようやくダメージから回復して立ち上がる。
要するにスティラは水が苦手なのではなくて、水の上という状況が苦手なのだ。人間は水の上には立てないのだから、普通は沈む。橋の上でもすぐ足元に水が勢い良く流れている。何と無く自分が宙に浮いているような気がして、その感覚が気に入らない、というこ

とらしい。
「…リーファ君と同じですよね」
「だな」
クアッドが頷くと、スティラは瞳に涙を貯めて首を傾げる。
「リーファもスティラと一緒で…空を飛んだり、水の上に浮いたりするものが苦手なんだ」
「私は…空は別に…」
魔術機甲甲冑で空を飛ぶのは別段、怖いと思わない。あれは自分で制御するものだから問題は無かった。
「じゃあ先に行けばいいじゃん」
クアッドが対岸まで続く端の先をすっと指差すと、スティラが俯いた。
「なんで？」
「は？」
スティラの身体に魔術機甲甲冑が装着されて、クアッドは驚く。
「なんで私が欲しいものは手に入らないんだろう」
どんっと轟音を鳴らして王都方面へ飛んでいく。
「本当に行きやがった」
クアッドは頭を掻くと、ダイキとリーファがため息を吐く。
「最低」
「情操教育を間違えましたか」
二人に非難されるような視線を浴びてクアッドがたじろぐ。
「スティラさんって本当にクアッドが好きだったんですね」
「そのようです」
リーファが呟くとダイキが頷く。
「私も最初はクアッドをからかっているだけかと思ったんですが…ねぇ」
「へぇ」
クアッドは人事のように呟くと、リーファがぱんっとクアッドの頬を引っ叩く。

「女の敵ですね」
「むしろ、男の敵でもありますよ。かわいい女性に好かれる野郎はね」
ダイキがにやにやと笑う。
「あんたまで何言いやがる。奥さんにばらすぞ」
「それは困る」
本気でダイキは橋の欄干に手を突いて、後悔しているのか項垂れる。
「とりあえず、クアッド君。王都に着いたらスティラ姫に謝ること」
「はぁ」
クアッドはいまいち納得できていないのか生返事を返す。
本当にわかってないのかしら？
リーファは首を傾げると、とりあえず歩を進める。
「ふぅ」
長すぎる橋を終える頃にはようやく慣れたのだが、クアッドはまだ何か考えているのか、疑問を解決できていないように首をかしげている。
「クアッド君、お迎えです」
ダイキが前を指差すと、魔術機甲甲冑を身に着けたままのスティラが剣を地面に突き刺し、それを握って立っている。
「あい？」
クアッドは目を丸くすると、ヘルムを未装備のスティラがこちらを見て、口の端を吊り上げるようにして笑っている。
「悪女みたいです」
「ですねぇ」
リーファとダイキはその異様なオーラを発しているスティラを見て、顔を見合わせる。
「リレインさんは…空間移動術を使える魔術師素養があったわけですか」
リーファがスティラの後ろに立っているリレインを見つけて、小

さな声で呟いた。
　空間移動術は魔法の中でもかなり難しい高位魔法に位置する魔法で、宮廷魔術師と言えども使える人間は数えるほどしかいない。騎士でありながら、空間移動術を使えるとなると、諜報部員に生まれてくるためのような存在としか言いようが無い。
「クアッド・アルマーティ。貴殿を我が王国の来賓として迎え入れるよう、父からの伝言だ」
「ってことはリレイン、俺は本当に…？」
　王族の人間だったのか？とは尋ねないが、その意図を察してリレインが複雑そうな顔をして頷く。
　やべぇ…なんか複雑なことになってきやがったぜ。
　昔から面倒な事はできるだけ避けて通ってきたのだが、リーファの行動で大体は面倒なことに巻き込まれる、が…今回は勝手が違った。まさか自分の知らない…失われたキヲクが絡んでくるとは思わなかった。
「如いては…クアッド、シルヴァラン王国第一王子を王都まで安全に送り届けるよう承り…」
　スティラが不満なのか、哀しいのか、いくつもの感情が入り混じったような無表情でクアッドを真っ直ぐに見つめた。
「私はその事を光栄に思います」
　畏まって跪くスティラとリレインにクアッドは…逃げ出した。
「え？」
「はい？」
　橋を逆走しているクアッドの背中を見て、リーファとダイキが目を丸くする。
「何故逃げるんだ？」
「し…知りませんよ」
　顔を上げて逃げ出したクアッドのその意味不明な行動にスティラが思わずリレインに尋ねるがリレインにその真意がわかるはずもない。

「何故逃げる！」
「しるかあああっ」
スティラがクアッドの後ろに付いて追いかける。魔術機甲甲冑の機動力にクアッドが逃げ切れるはずも無い。クアッドも魔術機甲甲冑を装備しようとしたがリーファがロックをかけているのか装備できずに、とりあえず足を動かした。
「ええい鬱陶しい！」
スティラが前に出てクアッドを両手を広げて止めようとする。
「ここは橋の上だぞ！」
「ひぅ！？」
恐怖感を思い出してスティラが身をこわばらせると、その脇をクアッドがするりと抜ける。
「卑怯者がああああっ！」
スティラはまたクアッドに一枚かまされて、頭の中が真っ白になった。
「私がどんな思いで貴様の前に傅いたと思っているんだ！」
「しるかああ！お前が勝手にそうしたんだろうがっ！」
クアッドは後ろから魔法で狙撃されてもんどりうって倒れる。
「なっ！」
遥か後方、リーファの魔法狙撃にやられたことを察知してクアッドは川に飛び込む。
「！？」
スティラが水面すれすれに飛ぶと、クアッドの姿が見えない。
「何処に行った…」
周囲を見回してもクアッドの姿は無かった。
「逃げ…た…」
スティラは舌打ちすると、リーファを抱えたダイキとそのすぐ後ろにリレインが追従して、スティラの側に四人が集まる。
「えっと…ダイキさん、リーファさん。全ての任務を放棄してクアッドさんの身柄の拘束を騎士団長に命じられました…」

リレインが申し訳なさそうに報告すると、ダイキは苦笑する。
「これは…少々厄介なことになってしまいましたよ」
拘束するも何も、その対象が全力で逃げ切るつもりなのだ。
元ハンターのクアッドを山間部で探すのは至難の業。相手はサバイバルの知識を全て自然に学習している野生に最も近い人物。
「源流…シェルトス山に入られたら軍でも探し出せるかどうか」
ダイキは川の上流を見上げて、ため息を吐いた。
恐らくクアッドは山の中に壮大に引きこもってしまった。
「なんで逃げたのよ」
スティラは意味不明なクアッドの行動に頭を悩ませる。
「クアッド君は…言ってみれば戦闘のプロですから、自分の状況がわからなくなったりすると絶対に安全なポイントまで撤退して戦場において自分の立ち位置を再確認する癖がありますよね」
ダイキがリーファに視線を送ると、リーファが頷く。
「でもまぁ、アンカー打ち込んだのでどこにいったかはわかります」
先ほどクアッドにぶつけた魔法は、追跡探知を含んだ精霊粉のマジックアイテムを使用した、対象を感知できるもの。クアッドの行動原理を良く知っているからこそ出来る芸当だった。
「じゃあ、クアッド探さないと…」
リレインがおろおろと川を覗き込む。上流は水量が少ないがだいぶ流れも早い。流されていたりしたら大変だ。
「大丈夫ですよ」
リーファが橋に向かって手を伸ばす。
「クアッド、十秒前です」
「？」
全員が首を傾げると、リーファが妖艶に微笑む。
「きゅー、はち…ごー」
「待て！八の次は七だろうが！」
クアッドがひょいと橋の下から姿を現すと、リーファが苦笑した。
「隠れている場所ごと吹き飛ばすつもりだったのか」

スティラが渋い顔をしてリーファを睨む。この橋を壊してでも炙り出すほど急務ではないのだが、本当に壊されてしまったら進軍に響く。そのことをもう少し考えて欲しいと口には出さないが、その浅はかさにさすがに戸惑う。

「とりあえず話をまとめましょう」

ダイキが二度手を叩いて全員の注目を集める。

「リレイン君」

「はい」

リレインが頷くと、少し考えてから口を開いた。

「国境の街が壊滅したことは帝国議会に伝えました。ダイキに対する拘束命令は解除され、クアッド、リーファ二名と同行するようにという命令が騎士団長より発令されています」

「了解しましたよ」

ダイキが頷く。

「次いで、私は唯一使用可能魔法の空間転移によって王都グロリアスとあなたたちを結ぶメッセンジャーになっています。スティラ様に下された命令はクアッド第一王子の保護です。可能な限り王都グロリアスにて保護するのが妥当と判断され、王都グロリアスに入った場合は、シルヴァラン王国に使者を送り、クアッドをシルヴァラン王国へ引き渡すよう、王の命令です」

「つまり、クアッドは本当に王子だったわけですか？」

「です」

リレインがクアッドを真っ直ぐに見つめると、クアッドは視線を逸らした。

「今更王子だとか、しかも隣国のとか言われても困るよな」

「ですね」

苦笑いするクアッドにリーファが頷く。

「考え方によっては互いに我関せずだった王国同士が手を結ぶいい機会なのかもしれません」

ダイキに言われてクアッドが頷く。

「俺は自由なほうがいいんだが…スティラを見てるとどうしても王族って堅苦しくて戴けないんだよね」
「まぁ、王族などに名を列ねると面倒なことは多いな」
スティラもそこは否定せずに頷く。
「ただし、今は一刻を争うんです。クアッド、レディスト王国とシルヴァラン王国を結ぶ橋渡しになって戴ければ、今後の戦況もだいぶ楽になると思います」
「さすが元軍師。っていうか…まぁそれが妥当なんだろうけど」
逃げ出そうとしたほどその王族、というのが嫌いなわけで…。
「提案がある」
「？」
全員が首をかしげてスティラを見ると、ダイキが「なるほど」と呟く。
「クアッド、リーファ、リレイン、ダイキを私の近衛隊として認定する」
「それが一番、動きやすいですね。権限も強くなるし、クアッドに限ってはシルヴァラン王子として動けるし、こっちでは近衛隊として動ける」
「そんな都合よく行くのかね？」
「行くだろうね」
ふわり、と優しい声が後ろからかけられて、全員が驚く。
クアッドの背後に魔術機甲甲冑を装着したローウェルが立っていた。
「義兄さん、探したよ」
「昨日の…双子か」
「ローウェルと申します。ローウェル・ロザリア」
綺麗な顔立ちで中性的、それでいて紳士さを伺わせる優雅な足取り。
「ボクは信頼されていないからね。本当は兄のほうが良かったのかもしれないけれど…そういう二国間で動きたいって言うなら、父上

にそう伝えておこうか？」
「頼むわ」
クアッドが片手を投げやりに挙げると、ローウェルが苦笑する。
二人は確かによく似ていた。ローウェルとクアッドの顔を交互に見ると、その特徴はよく似ている。温室育ちそうなローウェルと眼光の鋭いクアッドは野生を感じる。育ちの違いだけが違うだけで、その他は良く似ていた。
「ただ父上に顔を見せてやって欲しいのだけれど、それはどうする？」
「今は少し待ってくれ。俺は知りたいことがある」
「義兄さんがどうして、今のような状況になったのか、知りたいんだね？」
「そうだ」
クアッドが頷くと、ローウェルも頷いた。
「そう、僕たちもそれを調べている最中なんだ。第一王位継承権を持つ義兄さんは誘拐されてから、今までの経緯がほとんどわからない」
「ではどうして、クアッドを王子だと確定したんですか？」
ダイキが尋ねると、ローウェルはしまった、という顔をして顔を顰めた。
「昨日、義兄さんと戦闘をしてその毛髪を少し拝借させてもらったんだ。うちの魔術研究員がそれを解析したら、百パーセント第一王子の魔法細胞と一致した」
「なるほど」
ダイキがうんうんと頷く。
「おや…？」
ダイキがふと気付いて首をかしげる。
「確かクアッド君の本名はクライスですよね？」
「だね」
「クライス第一王子は四歳のときに…教会最高権力枢機卿の娘と許

婚の…」
「あ…」
リレインもスティラもそのことは知っている。二人は同時に声を上げるとローウェルが苦笑した。
「生きているとなれば、それも再成立しますね。今、枢機卿の姫巫女と呼ばれるマザーマリアはクライス王子の生存を知って嬉々としておられました」
「クアッドって呼んでくれよ。俺はクライスって名前に馴染みが無くてね」
「そう言うと思いまして、好きにしろと父上は申してたね」
ローウェルが苦笑するとクアッドは舌打ちする。どうやら性格まで向こうは調べ上げたようだ。
「まぁ義兄さん、今までの功績は両国で認められているようですね」
「クアッド君は優秀な我が国の騎士ですからね」
ダイキが苦笑するとローウェルが頷く。
「クアッド君、順を追って行動してみては？」
「俺は今のままがいい」
クアッドが駄々をこねるようにその場に座り込むと、リーファが苦笑した。
「クアッド…」
リーファがクアッドの隣に座ってそっと耳打ちすると、クアッドがうんうん、と頷いている。
「本当にそんなふうになるのか？」
「たぶんねー」
リーファが微笑む。
「じゃあ、そうしようか」
クアッドが立ち上がってリーファに手を差し伸べると、リーファがそれを受けて立ち上がる。
「まず、王都に向かう。グロリアスからシルヴァランに行って…」
どうするんだっけ？とリーファに尋ねると、リーファが困ったよ

うに微笑して続ける。
「シルヴァラン王国にレディスト王国との共同繁栄戦線とでも称する同盟を組んでいただきましょう。そしてクアッドは第一王位継承権を保有する王子としての承諾を受ける」
「承諾を受ける条件が同盟かな？」
ローウェルが首をかしげると、リーファが頷く。
「この件に関して、私とリレインは同盟協定決議に参加するスティラ王女の護衛という形でそちらの国に向かいます。当然、私たちはスティラ王女の近衛隊として同行するわけで、クアッドも例外ではない」
「義兄の立場が近衛隊である以上、重複した立場であることはどうするんだい？」
ローウェルが目を細めるとリーファが流し目をして微笑む。
「クアッドは貴国の王子であると同時に、我が国のスティラ近衛隊の隊長であるということを了解しない限り、同盟も組めなければ第一王位継承権も認めない。それは貴国にとっても政治的な混乱を迎えることになるでしょう？」
「なるほど、双方共に困ることがあるからこそ、そういう無理な交渉ができるわけか。貴女は恐ろしい人だな」
「お褒めに預かり光栄ですわ」
リーファが頭を下げるとローウェルが眉を顰める。褒めたわけではない、が…。
「私もそれでよい」
スティラが何処か面白くなさそうに呟くとローウェルがハタとダイキを見る。
「貴殿はどうするんだ？」
「そうですね、私も一応近衛隊なんですよね？」
「そうだ」
スティラが尋ねられて頷くと、ダイキが「そういうことです」と言う。つまり、同行。

「ローウェルには国のほうを説得して欲しい」
「義兄さんのためなら。だけれどこっちの国も少し忙しくなっている事は忘れないで欲しい。アーミルズ共和国がレディスト王国に進軍したことは正直、脅威だ。同盟を組んだところで貴国が血を流すことには変わりない」
ローウェルがスティラを見るとスティラが頷いた。
「我が国の民が血を流すことは明白…その量を少しでも減らすために私は貴国と同盟を組みたい」
「御意」
ローウェルが地面を蹴って空に消えてゆく。
「クアッド君、リーファ君、君たちは何を考えているんですか?」
ダイキが二人に尋ねると、二人は顔を見合わせて苦笑する。
「私も聞きたいな…」
スティラが悔しそうに声を上げた。
クアッドとスティラの間にある絆や協調はとうてい他の人が入れるようなものではないようで、それを見せ付けられて心が苦しい。
スティラは正直にそう思っていた。
「リレイン」
クアッドに呼ばれてリレインが首をかしげる。
「先行して今回の話し合いの結果を王都に通達してほしい。王が了承しなけりゃこの話は進まない」
「了解」
リレインが頷くと、足元に光の文字が浮かび、円が刻まれる。
「最上級魔法の転移魔法か」
クアッドは苦笑すると、リレインが光に包まれて姿を消した。
「聞かせてはくれないのか?」
スティラがなおも食い下がると、ダイキがスティラの肩を叩いた。
「あの子達は…二人で生きてきたから、大切な事は二人で決めるんですよ」
私はそこに入れないのか…。

寂しいような、哀しいような…。
「王都へ」
リーファとクアッドが並んで歩き出す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1188h/

Sword Dancer　　～奪われたキヲク～

2010年10月9日22時07分発行